

政談月の鏡

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂

青空文庫

政談月の鏡と申す外題げだいを置きまして申し上るあぐお話は、宝曆年ほうれき
 間の町奉行で 依田豊前守よだぶぜんのかみ様の御勤役中に長く掛りました裁判で
 ありますが、其の頃は町人と武家ぶげと公事くじに成りますと町奉行は余
 程六ヶむすしい事むすで有りましたが、只今と違ちがひまして旗はたもと下は八万騎、
 二百六十有余頭かしらの大名が有つて、往来は侍で目をつく様です。其
 の時の江戸の名物は、武士、鯉、大名小路、広小路、茶見世、紫、
 火消、錦絵と申して、今の消防方は四十八組有つて、火事の時は
 道路が狭いから大騒さわぎです、焼出やけだされが荷かを担かついで逃げ様とする、

むこう

向からお町奉行が出馬に成る、此方の曲角からお使番が馬で来る、

彼方から弥次馬が来る、馬だらけに成りますが、只今は道路の幅

が広くなりずーツと見通せませんが、以前は見通しの附かんように

とおりみち

通路が迂曲て居りましたもので、スワと云うと木戸を打ち路

次を締める、少しやかましい事が有ると六ツ限で締切ります、此

の木戸の脇に番太郎がございまして、町内には自身番が有り、そ

れへ皆町内から町内の家主（差配人さん）がお勤めに成って、

自身番の後の処が屹度番太郎に成って居たもので、番太郎は拍子

木を打って夜廻りを致す丈の事でスワ狼藉者だと云っても間に合

う事はない、慄えて逃げて仕舞い、拍子木を溝の中へ放り出して

番屋へ這込むなどと云う弱い事で、冬になると焼芋や夏は心

ところて

太^んを売りますが、其の他^た草履草鞋を能^よく売ったもので、番太郎
 は皆金持で、番太郎は越前から出る者が多かつたようで、それに
 湯屋の三助は能^{のとのくに}登国から出て来ます、米^{こめつき}搗は越後と信濃から
 と極つて居ました、江戸ツ子の番太郎は無い中に、長谷川町の^{はせがわちよう}
 木戸の側^{わき}に居た番太郎は江戸ツ子でございます、名を喜助^{きすけ}と云つ
 て誠に酒^{さけ}喰^{くら}いですが、妙な男^{よばん}で夜番をする時には堅い男だから
 鐘^{かね}が鳴ると直^{すぐ}に拍子木を持って出ます、向うの突^{つきあたり} 当^{あたり}までちや
 んと行つて歸つて来ます。大概の横着者は、チヨンく／＼チヨン／
 くと四つ打つて町内を八分程行くと、音さえ聞えれば宜^いいんで歸
 つて来ますが此の男は突当りまで見廻つて来ないと気が済まない
 と云う堅い人で、ボンチョン番太と綽^{あだな}名が有る位で何^どう云う訳か

と聞いて見ると、ボーンと云う鐘とチヨンと打出す拍子木と同じだからボンチヨン番太と云う、余程堅い男だが酒が嗜すきで暇まさえあれば酒を飲みます、女房をお梅と云つて年齢としは二十三で、亭主とは年齢が違つて若うございますが、亭主思いで能く生なま酔まいの看護もを致しますので、近所の評判にあの内儀かみさんは好いい女だ喜助の女房には不釣合だと云われる位ですが、誠に貞節な者で一体情深い女でございますから、本当に能く亭主の看護すきを致して、嗜すきな物を買つて置き、

梅「寒いから一杯お飲たべかえ、沢山飲むといけないよ、二合にしてお置よ、三合に成ると少し舌が廻まらなくなる、身体さわに障さわるだろうと思つて案じられるから」

喜「うむ寒いな、霜月に這入つてからグツと寒く成つた何うしても寒くなると飲まずにや居られねえな」

梅「寒いたつて、寒い訳だよ、朝から飲んでるからもう酔い醒さめのする時分だからさ、町まち代の總そう助すけさんが来て余り酒を飲ましてやアいけない、あれでは身体が堪たまるまいと被お仰つて案じておいでだよ、皆みな様が御ご鼻ひ頂いだから然そう云つて下さるんだよ」

喜「もう是れ限ぎり飲まねえから、よう宜いいからもう一本爛つけなよ」

梅「爛けなつてお酒が無いんだよ」

喜「無けりやア買つて来ねえな、おい」

梅「もう今日はこれだけにしてお置きな」

喜「熱い時分ならそれで宜いが、寒い時分には二合じゃア足りねえ、ようお前めえ能く己おれの面倒を見て可愛がつて呉んな、其の代り己がお前を可愛がつて遣やる事もあらア」

梅「お戯ふざけでないよあのお店たなから酒の下物さかなにしろつて台所の金き藏んぞうさんが持つて来た物があるよ」

喜「彼奴あいつめ下物だつて鮭の頭位だろう、あゝ有難い持つべきものは女房か、有難いな、何どうしたつても好いい酒は四方よもへ行かなければ無ねえな」

とクビりりく、飲んで居る、其の時店先へ立止りました武士さむらいは、ドツシリした羅紗らしやの脊割せわり羽織ばおりを着ちやくし、仙せん台だい平ひらの袴はかま、黒手くろてのきはちじょう黄八丈こそでの小袖こそでを着き、四分一ごしち拵しらえの大小、寒いから黒縮緬くろちりめんの頭巾

を冠^{かぶ}り、紺足袋^{こんたび}日勤草履^{につきんぞうり}と云う行装^{こしらえ}の立派^{たて}なお武士、番太郎の店へ立ち、

武「これ此^{こゝ}処^{ところ}に有^ある紙^しを 一^{いち}帖^{じょう}呉^くれんか」

喜「へいお入^い来^でなさいまし是^{こゝ}は何^{なん}うも御免^{ごめん}なさいまし、誠^{まこと}に有

難^{がた}う、其^{そこ}処^{ところ}に札^せが附^ついてます、一帖^{いちじょう}幾^{いく}らとして有^ありますへい半紙

は二十四文^{にじゅうよんぶん}で、駿河^{すまが}半紙^{はんし}は十六文^{じゅうろくぶん}、メンチは十^と個^こで八文^{はちぶん}でげす、

藁^{わら}草履^{くつ}は私^わの処^{ところ}が一番^{いちばん}安^{やす}いのでございます、有^あ難^{がた}う誠^{まこと}に何^{なん}うも、

其^{その}処^{ところ}へ行く^いくんですが、ちよいと錢^{ぜに}を箱^{はこ}の中^{なか}へ放^{はな}り込^こんで一帖^{いちじょう}持^もつ

て行^いつて下^{くだ}さいまし、札^せが附^ついてますから間違^{まちが}えは有^ありませ^せん」

武「なに貴^{あなた}様^{さま}は余^{あま}程^{ほど}酒^{しゅ}が嗜^すきだ^だな、私^わが此^{こゝ}処^{ところ}を通^{とほ}る度^{たび}に飲^のんで

居^おらん事^{こと}はないが、貴^{あなた}様^{さま}は余^{あま}程^{ほど}酒^{しゅ}家^かだ^だのう」

喜「へイ嗜きです、お寒くなると朝から酒を飲まねえと気が済みませんな」

武「酒家は妙なものだな、酒屋の前を通つてぷーんと酒の香が致すと飲み度くなる、私も同じく極嗜だが、貴様が飲んで居る処を見ると何となく羨しくなる」

喜「え、殿様もお嗜きで、極好い酒が有ります、私やア番太郎ですが江戸ツ子の番太郎は余り無えんです、極好い酒が有りますから、誠に失礼ですが一つ召上れ」

武「それは辱いなア」

梅「あらまア御免遊ばせ酔つて居りますから、お前さん何と云う事だよ、お武家様を番太郎の家などへお上げ申す事が出来ませぬ」

ものかね」

喜「いや嗜きじやア堪らねえ、ね工殿様、此方へお上んなさい、長い刀を一本半分差して斯ういう家に上ると身体を横にしなれば這入れませんよ」

武「是は御家内か、私も酒が嗜きでな、此処を通る度に御亭主が飲んで居る、今一寸買物をして見ると矢張飲んで居て羨しく遂やる気になりました」

梅「でも汚ない此んな狭い処へ」

喜「宜いから黙つてろ、殿様此女の里は白銀町の白旗稲荷の神主の娘ですが、何うしたんだか、亭主思いで、私が酒を飲んで世話を焼かせますが、能く面倒を見ます」

梅 「お止よしよ」

武 「では一いっばい盃戴いこうか」

喜 「お酌をして上げな、大きい盃もので」

武 「これは御内儀ごないぎ痛み入りますな、お酌で」

梅 「誠に何うも召上る物が有りませんで」

武 「いや心配してはいかん、却かえつて是が宜しい成程是は何うも

余程好いい酒を飲むな」

喜 「え、四方よもで、彼家あすこでは好い酒を売ります、和泉町いずみちようでは彼

家ばかりで、番頭わつちが私を知ちつてるので、私わが買いに行くゆと長谷川

町の番太が来たつて別に調合を仕しないで、一本生いっぽんぎの鬼殺おにころししを呉

れますが、酒は自慢まで」

武「うむ是は堪らん、では近附ちかづきの為に「盃いっばい」

と喜助に差しました。喜助は頭かしらを下げ。

喜「へー有難う、おいお梅此処こゝへ来い酌をして呉れ手前てめえは己に能く酒を飲むなく、てえが立派なお武家様がこんな汚い家うちへ這入つて来て番太郎と酒を飲のみ合あい、殿様のお盃さかずきを私わしが飲んで其の猪口ちよくを洗そぐのは水臭すくいつて殿様が直すくに召上ると云うのは酒の徳だ」

武「酒には上下の差別をしてはいけない」

喜「洒落しやれた好い殿様だ、何卒どうぞ毎日来て下さいまし、殿様私わっちの爲めには大切のお店の番頭が私を鼻屑はなづかで去年の暮に塩辛を呉れましたが、好い鯛の塩辛で、それと一緒に雲丹うにを貰ったんですが、女か房ゝあは雲丹をしらねえもんだから、鬼を喰うと間違えました、是は

からすみ

武 「是は何うも皆酒家の喰う物ばかりで」

梅 「何かお肴を」

喜 「鰻でも然う云つて来ねえよ」

梅 「^{あが}上るかえ」

喜 「上つても上らなくつても宜い、^{どじょう}鱈の抜きを、大急ぎで然う

云つて来や、冷飯草履を穿いて往け殿様彼は年は二十三ですが、

器量が好^ようございましょう、幾ら器量が好くたつて了簡が悪くつ

ちやア仕様が無^ねえが、良い了簡で私を可愛がりますよ」

武 「是は恐入った、馳走に成るからお前のうけも聞かなければ

ならんが、貴様は酒が嗜きだと云う処から初めて私^{わし}が来て馳走に

成り放しばなでは済まんから、少し譲り難い物を遣やらうか、是は容易に得難い酪酒いざで有る、何れいざで出来るか其処そこは聞かんが、是は何か京都の大内から將軍家へ参つて、將軍家から御三家御三卿方へ下されに成つて、たしない事いざで有るから其の又家来共に少しずつ之を頂戴致させるんだが、何うも利き目が違つて、其の酒の中へほつちり、たらりと落して、一合の中へ猪口ちよくに四半分もポタリと落してやると何なんとも云えん味あじわいものだ、飲む氣が有るなら遣らうか」

喜「是は何うも、何なんですかえ…夫それは有難うございます…此盃これへ何卒どうぞ…是は何うも頂く物は、えへ、ゝ大きな物へ」

武「余り大きな物へ入れちやア困る、徳利が小さいから、これ

へ入れてやろう」

風呂敷を解いて小さい徳利を取出して、栓の堅いのを抜きま
して、首を横にしてタラ／＼／＼と彼是れ茶椀に半分程入れて、
武「実は私も親類共へ些と遣り度いと思つて提げて来たのだが、
馳走に成つて何も礼に遣る物がないから」

喜「有難う存じます、お、お梅、行つて来たか」

梅「あゝ行つて来たよ」

喜「今な、禁裏さまや公方様が喰つて、丁寧な事ア云えねえが、
御三家御三卿が喰う酒で番太郎風情が戴ける物じゃねえんだが、
殿様が遣ると仰しやつて戴いた」

梅「夫はまア有難い事で、何もございせんが、召上るか召上

らないか存じませんが、只今鱈ぬぎの抜を云い付けて参りましたから」

武「何も構つて呉れちやア困る」

喜「宜いから彼方あつちへ行つてろ、夫それから香物こうくの好いのを出しな」

武「夫それを直接じかに飲んではいけない、何どんな酒家さけのみでも直接にはやれない」

喜「なに旦那わし私は泡盛でも焼酎でもやります」

とグイと一口飲みました。

武「此奴こいつア気強きつい」

喜「ム、是は何うも酷ひどいな、此奴ア、ム、脳天迄し滲みるよ

うな塩梅あんばいで」

武「なか／＼えらいな、それを二三口と飲む者はないよ」

喜「なにニタ口、訳アございません、薩摩の泡盛だつて何^なんでもない、ムム」

梅「何う仕たんだよ」

喜「なに宜^いいよ、ム、ム大變だ、頭が割れるような酷いもので、此^{こいつ}奴を公方様が喰^{くら}うかね」

武「酒を割つてやらんければいかん、残りは大^{だい}切^じに取つて置きな」

喜「へエお梅是を何^ど処^っかへ入れて置きな」

武「ポツチリ酒に割つて飲むのだ、私^{わし}は少し取急ぐで、是を親類共に持つて行つてやらんければならん、又此の頃に来る」

喜「只今抜きが直^じきに参りますが…左様ですか…御迷惑で、誠

に失礼を致して恐入ります」

武「大きに厄介で有った、御家内誠に世話に成りました」

と丁寧にお武家が家内にも挨拶をして落着き払って、チャラリ
 く雪駄せつたを穿ゆいて行く後影うしろかげを木戸の処を曲るまで見送つて、

喜「有難うございました、どうぞ殿様此のちの後も寄つてお呉んな

さい、へえへえ有難う、おい嬢かア、大切たいせつに取つて置きな、御三家

御三卿が喰くらうてえんだが、旨くも何なんとも共ねえものを飲むんだな、

香の物の好いいのを出して呉れ、酒家しゅかは沢山たんとの肴は要らない、香の

物の好いいのが有ればそれで沢山だ、併しかし酷ひどい酒を飲のませやアがった

なあ、痛いてえ、変な酒だな、おいお梅ちよつと一寸来て呉んな、ウ、ウ、

腹が痛えから一寸来て呉れ」

梅「極りを云つてるよ、お前飲み過すぎだよ、疝せん癩しやくに障るんだ

よ」

喜「彼あン畜生変な物を飲ましやアがつて、横ばらツ腹えぐを抉えぐるように、
鳩みぞ尾おち骨ほじを穿ほじるような、ウほ、あほ痛え」

梅「何うしたんだよ」

喜「ア、痛え、ア痛たた、お、お梅、脊中を押して呉れ、脊
中じやアねえ、肩の処を横ツ腹を」

梅「何処どこだよ」

喜「其そこ処こじやアねえ、此方こつちの足の爪先だ、膝だ、あ、肩だ」

ともがいて居ます、恐ろしいもので、節ふし々／＼の痛みが夥おびしく
毛穴が弥よ立だつて、五臟六腑のうらん惱らん乱致し、ウーンと立上るから女房

は驚いて居ると、喜助は苦しみながら台所へ這い出してガーと血の塊を吐いて身を震わして居る。お梅は恟りして、

梅「家の良人が何うか為ましたから誰方が来て下さいよう、總助さんく」

總「何うしたく、きまりだ、吐血だ、だから酒を飲んじやア宜かねえと云うのだ、何う云うものだこれ喜助確りしろ、喜助く」

喜「ウーン」

それなりに相成りました。

總「何う云う訳だ」

と云うとお梅は涙ながら、これく斯う云う訳で御酒を割って

飲まなければ宜いけないと云うのを家の良う人が直接ひとに飲じかみましたから身体うに障ちつたのでございましょう。

總そ「夫それは怪けしからん事だ、何しても御検視を願ねがわなければならん」

と云うので、御検視到来に相成りお医者も立会たつて調べると、是は全く酒の毒だが、尋常たゞの死しによようではない、余程き、め効能き、めの強い毒酒ではないかと、依田豊前守様の白洲へ持出したが御奉行が其の酒を段々お調べに成り、医者たちを立たちああわあせあして見ると、一ト通りならん処ところの毒薬で、何でも是は大名旗はたもと下うちの中に謀叛むほん之れ有る者、お家を覆くつがえさんとする者が、毒酒を試ししに來たに相違ないと云うので、女房に其の武家の顔を知しつて居おるかかと尋ねると、これこく斯こ

う云う姿の武家体ていと申し上げたので、人相書を作り八方十方へお手配てくばりに成り箱根の前まで手が廻る事に成ったが、知れません。

お梅は貞節な婦人ゆえ泣いてばかり居ります。里方で引取ろうと云うと、

梅「わたくし私はお願ねがいだから、あの武ぶ士しが毒を試ししに来て、始めから何うも様子が訝おかしいと思つたが、顔を知つて居るのは私わたしばかり、此の長谷川町を再び通る氣遣きぢいは有るまいから、人の盛さかる処へ行つてあの侍を見付けて、亭主かたきの敵かたきを強かいお上かみに取つて貰もらわなければならぬから、何うぞ私わたくしを吉原へ女郎わらわに売つて下さい、格子先へ立つ人の中にあの武家に似た人が有つたら騙だまして捕とらまえて亭主の敵を討つ」

と云い張り、幾ら留めても肯か^きず遂に江戸町一丁目辨^{べん}天屋^{てんや}の抱えと成つて名を紅梅^{こうばい}と改め、彼の武士^{さむらい}の行方を探すと云う亭主の敵^{かたきうち}討^うの端緒^{はたき}でございます。

二

今日^{こんにち}の処^{のち}は、長谷川町の番人喜助の続きとお話^{ふたみち}が二途に分^にれますが、後^{のち}に一つ道に成る其の前文でありますからお聴^にき悪い事^{にく}でございましょう、扨^{さて}築地^{つきじ}の本郷^{ほんごうちよう}町と小田原^{おだわらちよう}町、柳^{やなぎ}原^{はら}町と町内^{つな}が繋がつて居りますが、小田原^{おだわらちよう}町の家主^{やぬし}に金兵衛^{かねべゑ}と申^{まを}す者がございまして、其の頃^{いへな}は家号^{いへな}を申^{まを}して近江屋^{おうみや}の金兵衛^{かねべゑ}

と云う処から近ちかきん金と云われます、年齢としは四十二に成りますが、真実な人で、女房をお蓮れんと云つて三十八に成ります、家主いえぬしの内儀みさんは随分けんしき権式けんしきぶつたものでございませすが至つて気さくなお喋りのお内儀さんで、夫婦寄ると子が無いので其の噂ばかりして居ります。

蓮「旦那えく、もう何どうも何なんですね、夫婦の中に子の無い位心細いものは無いと思つて居ます、お互たがひに年とし齡を取つて、来年はお前さんは四十三だよ」

金「年とし齡の事を云うと心細くなるから其んな事を云うな」

蓮「だつてさ、夫婦養子をしてきかねも気心の知れない者にきかね気兼ねきかねをするのも厭いやだし、五人組の安兵衛やすべえさんなどは、無い子では泣きを見

ないから寧いっそ子の無い方が宜いと云う側から子が出来て、今度の
で十二人だてえます」

金 「あの人は子福こぶくしや者だのう」

蓮 「其の癖お内儀さんは瘦ぎすで子は無さそうなのに」

金 「お前めえなどはポツチャリ肥ふと満つて、お尻も大きいから子は出
来そうだが」

蓮 「授かりものですね、子がなければ夫婦養子を仕なければ成
りませんが、夫婦養子と云うよりも私の考えじやア一人娘を貰つ
て置いて、お前さん様には甥おいだが竹次郎たけじろうを宅うちへ入れる積りですが、
当人が厭だと云うかも知れませんが、お前様の血統ちすじだから是非此
の家やを継つがせるより仕方は無いが、嫁が悪いといけないよ、それが

本当の子で無いから私が心細いよ、お前さんには身内だから竹は
 宜いが嫁の根性が悪いと竹さんまで嫁に捲まかれて仕舞つて、訝おかしな
 了簡に成つて親不孝をされた日にア大變だよ、お前さんが長生き
 をしてお呉んなされば宜いが若もし眼でも眠つた後は大變だよ、だ
 から嫁の宜いのが欲しいね」

金「欲しいたつて無いよ、縁よりずくだから」

蓮「裏うらに居る売うトら者ないしやの浪人の娘は好いい器量だね」

金「うむ、彼あれは何どうも無いのう、品格と云い、親孝行でな、彼
 の娘こに味み噌そ漉しを提あげせせるのは惜いしいものだ、お父とつさんはヨボノ
 へしてえるがまだ其んなに取る年でもないようだが、寒ばさ橋しの側
 へ占あいりに出るのだが可哀想あだのう」

蓮 「あの娘を貰い度いもんだね」

金 「貰い度いたつて先方も一人娘だから」

蓮 「其処を工夫してさ」

金 「工夫たつて一人子だから呉れないよ」

蓮 「私に宜い工夫が有るんです、先方は大變に困つて居る様子だから、可愛がつて店賃を負けておやんなさいよ」

金 「店賃を負けるてえ訳にはいかない、地主へ遣らなくつちやアならないから」

蓮 「成る丈け催促をしないようにおしなさい」

金 「催促するのも、少しは遠慮をして居るのよ」

蓮 「彼んな親孝行な娘は有りませんね、浪人ぐるみ引取つても

構やアしない」

金「親付きでか」

蓮「親付きだつて、あの浪人者なら宜いよ、あの浪人者を呼んで、お前さんね、親一人子一人だが、良い子を持つてお仕合せだ、どうせ宅へ養子をするのだが、甥の竹と云う者が奉公先から下つて来れば宅の養子に成る身の上だが、彼に添わしたいように思うが、お前様も一人子だから他へ呉れる理由にも行くまいから、一緒こたにお成んなさいと云つて御覧なさい」

金「馬鹿ア云え、そんな事が云えるものか、あの浪人は堅い男だ、毎朝板の間へ手を突いて、お早うと丁寧に厳格した人だが、そんな篋棒な事を頭を禿らかして云えるものか」

蓮「じゃア斯う仕ましよう宅へみいちゃんだのおしげさんだのが綿摘みの稽古に来ますから、あの娘にも綿を摘む内職を成さいと云つて呼寄せ様じゃアありませんか、幸いすうちちゃんが休んで桶が明いてるから」

金「あゝ云う遠慮深い人だから身装があを通りだからつて寄越すめえ」

蓮「それは此方で貸して手間で差引くといつて悉皆り私の物を貸して遣つて習いに来ればもう占めたもので、内職が出来ても出来なくても、あの娘のは光沢が好くつて評判が宜い、是丈揚つたつて手習丈の物はなくても宜いから無闇に手間賃を出してお遣んなさいよ」

金「夫はそれ大変な散財だな」

蓮「夫から段々覚えて来たから前貸だと気を付けてお金子かねを貸してやって、ホイ／＼云つて子の様に可愛がつて遣つてお父とつさんが留守の内は私の側に置いて娘このようにして可愛がつて、段々馴な染じみが深く成るうち一年が二年と年としつき月がたつ内に、三年経つと竹が年期が明いて来ますから、丁度宜いねえ二人差向いに成つたら気を利かしてお外はずしなさいよ、私はお参りに行くゆよ、二人置いて行ゆけば、冬なら炬燵こたつが有るから当人同志で旨く成つて仕舞い、当人が来たいと云えば宜いじやアないか」

金「夫じやア無理無体にか、併しかしあの浪人は堅いから寄越すか知らん、おゝ噂をすれば影だ、ピー／＼風でさむさ橋に出て居て

も、見て貰い人もないかしてもう帰つて来た、帰り際に早いから
 屹度きつと寄るぜ」

浪 「え、御免を」

金 「はい」

浪 「留守中誠に有難う存じました、え、只今帰りました、清左
 衛門で」

金 「まア一寸お上あがんなさいよ」

蓮 「ちよいとお這入んなさい」

浪 「はい御免を、誠に何どうも両三日さんにちは引続いてお寒い事で、
 併しながら何いつ日も御壯健おたつしやな事で」

金 「其んな堅い事を云わないでも宜よろしい、お茶を煎いれて羊羹ようかん

でも切んなさい、なに無く成ったえ、何か切んなよ」

蓮「切んなつて切るものは無いよ」

金「じゃア最中もなかでも出しなよ」

浪「え、御内室ごないしつ様私わたくしが出来ますと娘一人を残しまして一日留

守に致し何かと御厄介勝で、夫それにお隣の麴屋のお内儀かみさんが誠に

御真実になすつて一通りならんお目をお懸け下され誠に有難い事

でございます、お礼にも都度つどくあがり度とう存じますが無分貧乏暇

なしで遂々ついで御無沙汰勝に相成つて済みません」

金「其んな堅い事には及びません、裏の方の屋根が少し損じたから其の内に修繕なおさせます、お前さんは能く毎日寒さ橋へお出でな
さる、此の寒いのに名さえ寒さ橋てえんだから嘸さぞお寒かろう、

ピュー〜風で、貴公はお幾歳です」

清「いえ何うも誠に多病の人間で、大きに病魔の為めに老けて見られますんですが、未だ四十六歳で」

金「御壯んですな」

浪「いえ甚く弱むしに成りまして困ります、貴方は何日も御壯健ですな」

金「マお茶をお喫んなさい」

清「是は有難う存じます、頂戴致します、結構なお茶で、手前は茶が嗜で素より酒が嫌いだから、好い菓子も買えません、斯くの如く困窮零落しては菓子も喫べられません、斯様な結構なお茶、結構なお菓子を、イエ〜是は戴きますまい是は娘に持って行つ

て遣わしましよう」

金「今お前様^{さんご}処のお嬢さんのお噂をして居たのだが、実に私は鼻が高い、私の長屋にあゝ云う親孝行の娘が居れば私は何^どの位鼻が高いか知れない、お前さんはお合せだと云つてお噂ばかりして居ます、お前さんが留守でも隙間^{ひま}なく働いて、長屋の評判も好し、ちよいと宅^{うち}へ来ても水を汲みましようか、買ひ物はありませんかといつて気を付けてお呉れで、御品格と云い、御器量と云い実に申し分が有りませんね」

清「イエ何う致しまして誠に不束^{ふつゝかも}者で、屋敷^{とん}育ちで頓^{まちや}と町家の住居^{すまい}を致した事がないので様子合^{あい}を一向に心得ませんから皆様^{それ}に不行届^{それ}勝ちで、夫に一体無口^{それ}で」

金「イエ余りペラ／＼喋るのは宜いけません、年の行ゆかん娘などがお世辞を云うのはいかんもので、今ね其の家内がお噂をして居ましたので、お宅で何か内職でもおさせですかえ」

清「イエ恥入ります、碌ろくな事も出来ませんが少々ばかり鼻緒を縫ぬいつたり致して居ります」

金「鼻緒も宜ようございましょうが、家内が綿わたを紡つむことを覚えて近所の娘むすめ子こに教えるので、恵比壽屋えびすやだの、布袋屋ほていやだの、通り四丁目の棒ぼう大だいや何かから頼たのまれてお店の仕事たなばかり為しますが余程宜いい手間で、立派な男の手間位には成ります、処ところが此の節おすみと云う娘こが休やすんでて桶かが明あいてますから、教おしえて上げ度たいが、甚はなはだ失礼しつれいで何なにうしたら宜いかろうなんて、家内これが云いいますから、

なに失礼な訳は無い、覚えてお父とつさんのお手助けに成れば結構だ、鼻緒を縫いってお在いでのようだが、夫それも時々休みが有るようだ、夫から見れば是は毎日の仕事だから少しはお父さんのお手助けに成るかも知れんと考えたんで」

清「夫は御親切に有難い事で、実は娘よも好い内職を皆さんが御当家へ来て成さるが、何うかして私わたくしもあゝいう内職を覚え度たいと

申して居りますが、何分立派なお嬢さん方の入らっしやる中へ」

蓮「いえそんな事を心配してはいけません、尤もつも宅うちへ参むすめる娘

達たちは可たなりの処この娘ですから其こん中へ這入るのだからとお思いなされるのは御尤ですが、私の着物が明あいてますから、碌ろくなのじゃアありません私が若い時分に着たので、今は入りませんから上げ

ちまつても宜よいが、失礼ですからお貸し申します、其の内に手間
 が取れ、ば又拵こしらえて上げるように為しますが、是は若い時分に締め
 た帯で、宅には娘はなし、親類にも女の児こがないから取つて置い
 ても仕様が有りませんから」

金「何か上げなよ、失礼だが半纏はんてんを、誠に失礼で御立腹か知
 らんが襦袢じゆばんなども上げなよ」

蓮「どうぞ不用なのですから、赤いのも今は土器色かわらけいろに成つた
 んです」

金「細帯も付けて上げなよ」

清「是は何どうも恐れ入ります、残らず拝借致しても他の物と違
 いまして、瀬戸物や塗物は瑾きずを付けた位で済みますが、着類きんぐいは着

れば切れるもので」

金「宜しい切れても、仕舞つて置いたつて折切れます、誰にも遣る者はなし詰らんわけだから着せて下さい、綺麗な身装をして出入りをして下されば私も鼻が高い、今だつて汚くも何ともない、私の綿入羽織が有つたらう、お前さんの身装を軽蔑んじやアございませんが是は古くつて一旦染たんで、一寸余所へ行く時に之を着て出て下さると私は鼻が高い、然うして姉さんは是非寄越しして下さいよ」

清「是は何共何うも御親切千万有難う、親子の者が窮して居りまするのを蔭ながら御心配下され、着物がなければ貸して遣ろうと仰しやる思召し、千万辱い事で、御親切は無にいたしませ

ん、然らば拝借を願います」

蓮「姉さんを屹度お寄越しなさいよ」

清「何のようにも是は願わなければ成りません、筆も嘸ぞ悦び
ましよう」

金「お筆さんと云いますか、私は始めてお名を覚えましたが宜し
く」

清「左様なら拝借を致します」

と清左衛門悉く悦んで、ニコくしながら家に帰つて来ました、
娘お筆は、寒さの取附だと云うにまだ綿の入つた着物が思うよ
うに質受が出来ず、袷に前掛だけで短い半纏に幅の狭い帯を締
てお筆は頻に働いて居ります。

筆「おやお帰り遊ばせ」

清「今日は風が吹くんで往来も繁くないから早く帰つて来た」

筆「私がお迎いにしようと思つて居りました処で、大層にこゝ
笑つて在つしやいますね」

清「お家いえぬし主さんが御親切に色々仰しやつて下さり、それにあ

のお内儀さんは綿を紡む内職が名人だそうで近所の娘達も稽古に
来るからお前も遣よこしたら宜かろうと、色々と御親切に仰しやつて
衣類まで貸して下さり、此の通り私わしに綿入羽織にしろと被おっしや仰つ
てこれを貸して下さつた実に御親切な事で恐入おだつた訳で、仇あだに思
つては成りませんが、実に仕合せな事で、何どうか一生懸命に覚え
て呉れるかね」

筆「お父様とうさま、わたくしは一生懸命に神信心をして上手に成つてお父様のお手助けをいたし度とうございますから御心配なく、来年の夏迄には屹度きつと一人前に成りますから」

清「然そう早くも覚えられまいが其の心得で居れば宜よい」

と直すぐに貰つた着物を着せて礼に遣ると此方こちらは嫁に仕様と思つたのでございませうから、ちやほや致し是から綿紡みを教えまして出来ても出来なくても、あゝ能く出来た、お前のはお店の受けたなが好よい。是は光沢つやが別だと云うので手間を先へ貸して呉れるように致して万事に氣をつけて呉れるから大仕合せおおじあわで、其の内暮になると何か手伝いをして遣り度たいと思つて居る処へ清左衛門が礼に参りました。

清「エ、御免を蒙ります」

金「おやお出なさい斯うなつて近々お出でになるに、然う

お前さんの様に窮屈で悪固くつては困る」

清「何うも私は武骨者で困ります、段々とお世話様に相成り何

共お礼の申し上げようがありません、先達は又出来もせん

ものに、前以てお給金を頂戴致し、中々今からお手間などを戴

けるわけのものでは有りません」

蓮「なアにお前さん何日でも旦那と噂をして居るの、大層お店の受けが宜い事、ちよいとお前さん早くお出しなさいよ」

金「あれはね其のどうせ来年の三月迄の手間賃で、私が上げる訳じやアない、店から来たんだから遠慮をしてはいけない、是は

ね私の心こころ許ばかりのお歳暮でお筆さんに上げます、家内がお年玉をつて、今から年玉を上げるのも可笑おかしいが、どうせ上げる物だからお歳暮と一緒に預かつて置いて下さい」

清「是は何うも暮の二十八日にお年玉を、是は千万辱かたじけない事で」

蓮「それから正月のうちはね、女子供は皆美みんない身装なりをして来る

から、貴方もお筆さんに着せ度たくお思いでしょう、また追おい々く春

の手間で差引きますが、年頃の娘の事ですから皆の身装を見たら

羨うらやましくも思いなさろう、仮令よし其様そんな気がないにもせよ、お筆さん

ばかり悪い身装をして来る訳にもいきまますまい、是は台なしに成

つて今は不粹ぶいですが、荒っぽい小紋が有るんです、好いいんじやア

ないんですが、お筆さんは人柄だけに小紋の紋付はお似合いだろ

うと思つて、仕立屋へ遣つたんではないので、家で縫つたんですよ、それ夫に帯は紫むらさき縷じゆす子が宜かろうと、斯こう云う訳で、赤い物が交まじつて気に入らないかも知れないが、朱しゆの紋もん縮ちりめん緬めんと腹合せにしてほんのチョコク／＼着るように、此の前掛は古いのですが、二度ばかりつきやア締めないんで、此かんざしの簪かんざしは私が若い時分かみざしに買ったんですが、丸まる鬚まげには差せないから、不や粹ぼなもんですが：」

金「貴方にお歳暮に羽織を上げましょう」

清「是は何うも斯うは戴けません、其んなに無闇と然そう下さる訳のものではない、又人様に無闇と戴くべき道理がない、然そう御鼻かえ肩かえ下かえさいますと却かえつて褪さめるもので、何うか末長く幾久しく」

金「其んな堅い事を云わずに取つてお置きなさい、只上げやア

しません、後で差引きますよ」

清「こんなに何うも何なんとも共ハヤ千万有難う、親子の者が助かり

ます、彼は誠あれに孝行致して呉れ、親思いでワクワク致して呉れま

すが、才はたらき覚の無い親を持つて不便ふびんとは思いなから、何一つ買っ

て与える事も出来ませんが御こちら当家へ内職あがに上るように成つてから、

結構な櫛たべものを戴いたり、食物なんまで贈つて下さり、何たる御真実の

事か実に何どうも此の御恩は決して忘却は致しません、千万辱ない

事たぐで有難う、折角の思召ゆえ当季拝借致しましょう」

と悦んで包みに致し小脇わづかに抱えて宅たくへ歸つて話すと娘は飛立つ

程の嬉しさ、是から僅わづかな物を持つて娘が礼に参るような事で、其

の年も果て、宝曆三年となりましたが、職を致す者は大概正月廿は

日迄つかは休みますので、此の金兵衛の宅うちの内職も十七日迄休みでございませう、丁度六日お年越しの朝早く起きて金兵衛は近辺に年始に出ました、此方こちらはお筆が昼飯ひるめしを喰たべましたから、かねて近金から貰つった小紋の紋付に紫緋子の帯を締めて出ると一際目立つ別嬪つびんでございませう、時々金兵衛の家内とお湯に行ゆきますから誘いました。

筆「お内儀かみさんお湯に入いらつしやるならお供を致いたしましょう」

蓮「私は今御年始客が有あるから先へ行いつてお呉くれ、直すぐに後から行くから、柳原町のお湯だろね」

筆「はい」

娘は一人でお湯に参まりましたのが一つのお話になりますことで、

お筆がそこ〜に湯から上りましたがまだお内儀さんが来るようすがない、何か御用が出来てお手間が取れるのか、お迎いに行こうかと、手拭を小桶で絞って居ると、最前から板の間で身体を洗って居た婆さんは、年の頃六十四五で、頭の中まんなか央が皿のように禿げて居り、本郷町の桂庵けいあんのお虎と云うもので、

虎「ちよいと姉ねえさん、待ってお呉れよ……おい姉さん」

筆「はい」

虎「お前ね、今此処こゝに居る人は一人か二人しか居ないよ、小紋の紋付に紫繻子の帯を締めて良い処ところのお嬢さんのふりをして、大胆な女じやアないか人の金かね入いれを取りやアがって、あの中着なかぎにやア金は沢山たんと入ってやアしないよ、三両一步入ってるの、此方こつちへ返

えせ、此の前も此方ア銘仙の半纏めえが失なくなつてらア、疾とうから眼を注つけて居たんだ、近所で毎度顔を見て知つてるぞ、左の袂たもとに入つて
 るから出しなよ、何なんだ利いた風な阿魔女あまつちよだ」

と口くちぎた穢のゝしなく罵るのを此方こちらは何を云われても只おどくして居ると、お虎婆アは無闇に来てお筆の袂から巾着を引出して、

虎「それ見やアがれ此の通りだ、此の阿魔女め」

と小桶を取つて投ほうり付けると小鬢こびんに中あたつて血が出る。娘だけに
 他はたが大騒ぎで、

番「外へ立つちやアいけません、板の間稼いぎでも何でも無い物の間違あやでげす」

と云つて居る所へ、人を搔分けて近江屋金兵衛が参り、

金「何だ〜」

番「是は大屋さん入らつしやいまし、相手は帰りましたが、本郷町の桂庵婆ばあのお虎あてえいけない奴で」

金「何か取ったのか」

番「婆アが取ったんじやア有りませんが、貴方の店子たなこで、それ浪人うらなで売うトらに出る人が有りましたよ」

金「ア、ア」

番「あの綺麗な娘が有りますな」

金「ア、お筆さんと云うのだが、何なんだえ、何どう云う間違いなんです」

番「婆アが云いますには嬢さんが巾着を取ったつて、嬢さん様が着

物を着て了しまい、手拭を絞しぼつてる所へ婆アが板の間から飛んで来て嬢さんの袂へ手を入れると、迂すべり込んだのでゞも有りますか巾着が出ましたお嬢様さまが他人ひとの物を取るようなお子様じゃ有りませんが」

金「なにー、篋棒めえ、貴様は何だ」

番「湯屋の番頭で」

金「何だつて番をして居るのだよ」

番「番はして居ましたが、袂から巾着が出たので」

金「出たつて他人ひとの物を取るようなお筆さんじゃアねえのに、

そんな悪あく名みやうを付けられて堪たまるものか、己の店子に間違まちがいが有

つちやア此の儘に捨置かれねえ、何処どこまでも詮議しんぎを為しなけりやア

ならねえ、他の事とは違ほかう、婆はアは何処どこに居る、姉あねさんは何処どこに居る」

番「お虎婆こアは先刻さつき帰りましたが、何なんでも是こゝは姉あねさんに恨うらみが有あつて仕した事ことでしょう、姉あねさんは間まが悪いとでも思おもつたか、裏うら口ぐちから駈かけ出した限きり行方ゆくまゝが知しれませない」

金「夫それは大お変まだ」

と汗あせをダクくかいて宅たくへ帰かつて参まり、

金「おい〜何故ゆゑお前めえお筆ふでさんと一いっ緒しょに湯ゆに行いかねえんだ」

蓮「だつて尾張おとぎ町の夫おとこ婦めかけが子こ供どもを連つれて来きて漸ようやく帰かして仕し舞まうと又また彌や兵衛へえさんが来きたのだもの」

金「今本郷ほんごう町の桂庵けいあん婆はアがお筆ふでさんに泥棒どろぼうをしたつて悪あく名みやう

を附けやアがった」

蓮「お前さん黙って居たかえ」

金「己は跡から行つたのだから様子が分らねえ」

蓮「お前さん何の為に行つたんだねえ」

金「知らずに行つたのよ、板の間だと云う騒ぎなんだがお前さ
え附いて行けば其んな事ア有りアしねえんだ」

蓮「私は宅の片付け物をして居らアねお前さんこそブラ／＼遊
んでばかり居る癖に」

金「遊んでやアしない、己が今湯屋の前を通り掛ると人が立つ
て居るから、何うしたんだてえと、浪人者の姉さんがなコレ／＼
てえから慌て、帰つて来た：お、清左衛門さんか、此方へお這入

り、大變な事が出来た」

清「へえー何う云うお間違いで」

金「今家内に小言を云つて居る処ですが、お筆さんと湯へ行く約束をしてお筆さんが誘つて下さると、丁度客が来て居たもんですから、お筆さん一人で柳原町の湯へ行くと、本郷町の桂庵の婆了、意地の悪そうな奴で妾の周旋しゅうせんをしたり何かしていけない奴です、其奴そいつがお筆さんに己の巾着を取つたつて、板の間から直すぐに上あがつて来てお筆さんの袂へ手を突ツ込んでお筆さんの袂から巾着を引出すと、僅かな金でも……腹たつア立ちやアいけない、取つたと云うのではない、是には何か理由いりわけの有る事だろつと思つうが、今歸つて、家内これへ厳やかましく小言を申して居る処で、お筆さんを奥へ連れて

つてなだめて居る内に、お筆さんが居なくなつたのだが、桂庵婆アに突つき合あわして掛合えば何うでもなるが、何ういう理わけ由よだか薩さつ張ぱ理由りよが分らねえ、恨うらみを受けるよような事ことは有ありやアしませんか、姉あねさんは他ひと人に憎にくまれるよような事ことは有あるまいと思おもうが何か有ありませんか」

清 「何ど処こへ参まりました」

金 「何ど処こへ行いつたか分わりません、世間よへ対たいして面めん目めなくお前まへさんに叱のられると思おもつて何ど処こかへ行いつたのでしよう」

清 「はい私わたくしは斯かく零落ろを致いたして裏家うらや住すいはして居ゐつても人ひと様の物ものを一厘いち一毛まいでも掠かすめるよような根性こんじやうは有ありません、殊ことに御当ごとう家け様さまから多分たぶんに此この春はるは戴かき物ものをして何なに一つ不足ふそくなく餅もちも搗つき明あ日は

七草粥でも祝おうと存じて居ましたに、人様の物を取りますなんて」

金「取ったか取らないか未だ分らない、なにお筆さんが人の物を取る訳はないが、お前さん何か本郷町の桂庵の婆アに恨を受けるような覚えは有りませんか」

清「桂庵の婆ア、あの何なんですか、色の黒い肥満ふとりしました…」

金「左様」

清「あの豊でっぶり胖肥満ふとりしました、頭の禿はげた」

金「左様」

清「うゝむ、あの婆ア」

金「ほら何か有るに違ちがえねえんだ」

清「昨年の十月頃から再度参り、お前の処の娘を他で欲しがる
 番頭とか旦那とか有るから世話を致そうと申しますが、私取合い
 ませんでした、すると昨年の暮廿九日に又私方へ参りまして、三
 十金並べまして、お前さんはお堅いけれ共三十金は容易い金じや
 ない、殊に暮ゆえ百金にも向うじやないか、此の金を取つて
 お嬢さんを他家の妾にしなさればお前さんの為めになる、悪い事
 は勧めないと申しますから、私は立腹致して、不埒至極な婆だ、
 仮令浪人しても武士だ、一人の娘を見苦しい目掛手掛に遣れるも
 のか、何と心得て居る、そんな事を云わずにと申して又金を出し
 ましたから、私は立腹の余り婆の胸倉を捕つて戸外へ突出して、
 二度と再び参る事はならんと云つて、唾を横ツ面へ吐ツ掛けて遣ら

わしました」

金「それだ、何しろ嬢さんの行きそうな処は有りませんか」

清「左様、何処どこと云つて尋ねて参る処も有りませんが、小日向こびなた

水道町に今いま井玄秀いまいげんしゅうと申す医者いしやが有ります、其の娘と手習朋輩

で前々まえ々懇意まごころに致した事が有りますが、手紙の贈答やりとりを致すと云

う事を聴いて居ましたが夫それへは多分参りますまいと思ひます」

金「だから何処か行きそうな処は有りませんか」

清「中番町なかばんちやうで外村金右衛門とむらきんえもんと云う是はその直参じきさんと申して

も小普請こぶしんで居ります、母方の縁類と云う訳でも何なんでも有りません

が極別懇ごくべつこんに致しまして、両度程連れて行きゆましたが夫へは多分参

りますまい」

金「だから何処か行きそうな処は有りませんか」

清「谷中やなかひぐらし日暮ずいおうざんに瑞応山なんせんじ南泉寺と云う寺が有ります、夫に

みやのうちけんじろう

宮内健次郎と云う者が居ますが、夫へは多分参りますまい」

金「行かない処ばかり云つては困る」

清左衛門は唯おどくして何処を探そうと云う目途めあてもなく心配

致して居ります。翌よくちよう朝あすに成つて、

金「清左衛門さん私の家わしうちへお出いでなさい、一緒に七草粥を祝おう

じゃアないか」

と云うので是から諸方へ手分けをして迷子を捜し大川筋を尋ね
させましたが知れませんが、今七草粥を祝おうと箸を取つて、喰たべに

掛ると表をバラバラ人が通り、

○「何うしたく」

□「浪除杭なみよけぐいに打付ぶつつかった溺死どぎえもん人は娘の土左衛門で小紋の紋

付を着て紫繻子の腹合せの帯を締めて居る、好いい女だが菰こもを船子ふなこが掛けてやった」

△「行つて見ろく」

金兵衛も清左衛門も之を聞くと等しく慌て、茶椀と箸もつを持たな
りで戸外おもてへ飛出したから見物人は驚きました。

○「何を 井鉢どんぶりばちを振廻すのだ」

清「そ其の土左衛門は何処に居ります」

金「旦那土左衛門は何処に居ります」

○「何を為しやアがるんだ、見ねえ、どうも気違きちがえだ、人に飯を

ぶつか
打掛けて」

金「何なんと心得て居る、町役人ちようやくにんだぞ、ど何処どこだ〜」

○「土左衛門へは船子が菰を掛けてやって、ブツカリ〜彼方あっちへ流れて行きました」

と云われて兩人は氣脱きぬけのした様になり箸と茶碗を持ったなりで帰つて来て、

清「はあー娘は面目ないので身を投げたか」

金「いや昨夜飛ゆうべ込んだものが然そう急に浮く訳のものじゃアない、似た人は世間に幾らも有る、お筆さんはよもや死んなさりやアしまい、心配なさんな」

清左衛門は実に呆然ぼんやりして、娘は盗賊どろぼうの汚名を受けこれを恥

かしいと心得て入水致した上は最早世に楽みはないと遺書を
 認め、家主へ重ね／＼の礼状でございます、其の儘浪宅をさ
 まよい出で諸方を探したが知れん。不凶氣附いたは高奈部の家の
 姪は放蕩無頼の女で、十六位から浮気心が有つて、只今は女郎に
 成つて居ると云う事だが、折々先方から手紙が来て、私に知らさ
 んように手紙の贈答をして居つたが、万一したら行き宜いか
 ら左様な処へでも行きはしまいかと、是から吉原へ這入つて彼処
 此処を探して歩行いたが分りません。店先を覗きながら段々来て、
 江戸町一丁目の辨天屋の前まで来ました。

娼「ちよいと喜助どん、あの格子先に立つて居るお客さんに会
 いたいから、そら覗いて居る人だよ」

喜「えへ、旦那く」

清「はい」

喜「華魁おいらんが貴方にお目に掛りたいと仰しやいますんで」

清「左様でございますか、何処どこへ出ます」

喜「何うか籬まがきの方へお出いでを願います」

其の内華魁が上草履うわぞうりを穿はいて跡尻あとじりから廻つて参りますのを

見て。

清「お前さんかえ、すっかり忘れてしまった、極年ごくの行かん時

分に会つたのだから」

娼妓はいきなり清左衛門の胸倉を固く捕とり、声を振立て、

娼「此の武家さむらいだよ、私の亭主に毒を飲まして殺した奴は」

清「何を……」

其の中にうち若わかいもの者おおぜいが多おおぜい勢せいにて清左衛門を取押えて大おおもん門もんの番所へ引く事に成りました。是れから直すぐに町奉行所へ出て、依田豊前守のお調べに成りましたが、此の下しもがわら河原清左衛門は人違いか、全く彼の毒を盛った武家さむらいか、是れは後篇に申し上げることにいたします。

三

え、引続きの依田政談で依田豊前守御勤役中には少しお六むすケしずい事があると吟味与力に任して置かず直じきく々くの御裁断があまりまし

て、先まず重罪なるものは罪を軽かろくいたすような情深いお奉行で
 余程お調べに仁じんけい恵がありました事でございませう、其の中でも吉よ
 田しだけんもつ監物の家の事に付いて豊前守様からまがりぶちかいのかみ曲淵甲斐守様へお引
 継になり、両奉行の誉ほまれになったというお話でございませう。宝暦の
 三年下河原清左衛門という浪人者が築地小田原町に裏家住いを致
 して居る中うちに、家いえぬし主金兵衛が、娘の孝心から誠に気の毒だとい
 うので、目を掛けましたから大きに親子の者も貧苦まぬかさいわいを免れ幸を得
 て喜んで居る甲斐もなく、翌年宝暦四年正月の六日年越しの晩に
 娘の行方が知れなくなつたので、父の下河原清左衛門が娘を探し
 に吉原に懇意に致す婦人が遊女になつて居ると云う話だから、相
 談をしようとするので、事によつたら娘が懇意に致した婦人があ

るから、其の遊女の所へ尋ねて往ゆきはしないかと、吉原へ参つて

格子先を覗いて歩くと、辨天屋祐三郎ゆうざぶろうという江戸町一丁目の大

おまがき

籬かきの次位大町小見世だいまちこみせというべき店で、此の家の紅梅やという

女が籬まで廻つて呉れおりというので、娘が居た事と心得て籬へ廻る

と、紅梅が下おりて来まして突然だしぬけに清左衛門の胸倉を取つて、私の

亭主に毒酒を盛もつた侍が通つたらば知らせて呉れ、と若い者にも頼

んであるから、四五人の若い者が来て左右を取巻き会所つれゆへ連行く

というので、清左衛門は会所へ引かれて、是から田町たまちの番屋へ廻

され、一通り調べがあつて依田豊前守役宅の砂利の上に坐る様な

事になつたから、人という者は災難のあるもので、此の毒酒の事

に就ついて依田様は余程心配をなすつて居たと見えて、直すぐに白洲へお

呼^{よび}出^{いだ}しに相成り、辨天屋の遊女紅梅、祐三郎代^{だい}かや、附添の者が皆出て居ります、清左衛門繩に掛^かつて御町奉行^{おまち}へ呼出される、依田様は八ツ時の御下城から直に御出席に相成りまして、じつと下河原清左衛門の顔を見て居りましたが、人は見掛けに依らんものと見えて柔和温順の人に悪人があつたり、或^{ある}は人殺しでもしそうな強^{こわ}い顔^{がん}色^{しよく}の者に却^{かえ}つて誠の善人がある、解らんものでございいますから名御奉行は皆向うの云う事を聞きますに、心に蟠^{わだかま}りがあると言葉に濁りがあるから、目を眠^ねつて裁判を致されたと申しますが、依田様も吟味中は目を眠^ねつて先の云う事を聞かれました。

豊 「新吉原町江戸町一丁目辨天屋祐三郎抱え紅梅、祐三郎代か

や附添の者罷り出でたかまかい

かや「皆出でましてございます」

豊「うむ、紅梅何歳に相成る」

紅「はい二十七なんです」

豊「うむ、其の方昨年十一月三日亭主番人喜助に毒酒を盛つた侍を取押えた由、是なる浪人清左衛門は其の方の夫喜助に毒を盛つたる者に相違ないか」

紅「はい、間違いやアしません、何も女郎になりたい事はありませんので、一生懸命に何うかして亭主の敵かたきが討ちたいと思つて親類の止るのも聞かずに泥水の中に這入り、苦海くがいの中に居ても万ひよつと

一して敵を尋ぬる手掛りにもなろうと思つたから、此んな処へ

這入つて居るので、察してお呉んなさいよ」

なんと云う。お奉行様は少しお考えで、

豊「夫それに相違ないな」

かや「かやが申し上げますが、もう紅梅が勤めて居りまして皆みんな是々これこれだと打明けて話しました、店の若い者や何かに皆頼みんなんでありますから、網を張つて待つて居た処へ、あの侍が来たというので一いちどき時ときに取押えましたから、まア容易たやすく繩なわに掛けて会所へ廻し、此たがひの度御奉行様の御厄介たがひに成りましたどうか何分宜しくお願い申します」

豊「うむ、浪人下河原清左衛門」

清「はゝア」

と残念そうな顔をしてずっと首を擡あげました。

豊「其の方は何歳だ」

清「四十九歳に相成ります、へえ…」

豊「昨年十一月三日八ツ半時じきと申す事じゃが、番人喜助方へ参つて小さい徳利とくりを持ち銘酒だと云つて喜助に毒を飲ませたに相違あるまい、真直まっすぐに白状致せ」

清「恐れながら手前毛頭覚えがございません、はい何故なにゆえに毒を盛りましようか、何等なんらの人違いか、頓と解りません、侍でござる、仮令浪人たとえしても汚名は厭いといます事で、如何にも残念に心得ます、何故斯様かような事を申すか頓と相解りません、神に誓い決して人を毒殺いたすなど、いは毛頭覚えのない事、御推察下さるよ

うに」

豊「其の方向いかよう様に陳じても、是なる遊女紅梅は貞節なる心から致して夫の敵が討ちたいばかりで遊女になり、其の侍を取押えて上かみに厄介を掛けても亭主の仇あだを討ちたいという精神から致して漸く尋ね当てた事である、逆とても逃のがれる道はない、さア何方いずかたに於て毒薬調合致したか、それを申せ」

清「はい、どうも思い掛けない事で、毒薬調合などというは容易ならん事で、医者としては、假令君父たとしくんぶの命たりとも毒薬調合はせぬのが掟おきて、夫それゆえ故医者に相成る時は、其の師匠へ証文を差出すと然さる医に承りて承知致して居ります、何故なにゆえに拙者が毒を盛りましょう、毛頭覚えなない事、拙者に能く似た者が有つて必ず人

間違いでござろう、毛頭覚えはございませぬ」

豊「亭主の敵を討ちたいという心掛の女が、毒を盛つた者と他の者と取り違えようか、如何に陳ずるとも逆も免れん処、其の方天命は心得て居るだらうな」

清「存じて居ります、存じては居りますが、決して覚えはございませぬ」

豊「上かみを欺くな」

清「いえ欺きません、殺して置いて殺さんと云えば上を欺き、殺しませんものを殺したというも上を欺く事でございます、どのような強い責せめに遭いましたも覚ええない事は白状いたされませぬ、はい如何にも残念な事で、御推察下され」

とどうも言葉の様子に曇りもなく、毒を盛るような侍ではない
 など云う事がお目に触れたから、

豊「然しかれば其そのの方は前ぜん々は何い処ずの藩中である、主しゆ名めいを申せ」

清「主名は申されません、主家の恥辱はじに相成る事、どのような
 お尋ねがあつても主人の名前は申されません、仮令たと身体いが砕けま
 しょうとも、骨が折れましても主名を明かしましては武士道が立
 たんから決して申し上げられません」

豊「其そのの方しゆつ出しよ生しよは何い処ずだ」

清「天地の間でございます」

豊「黙れ、其そのの方その奉行ちよを嘲らう弄らういたすな」

清「いえ、何どういたして、天下のお役人様、殊に御名奉行

と承り承知致して居ります、はなはだ甚恐れ多い事で、決して嘲弄は致しません、主名を申すと主のしゅう恥辱はじに相成るから申し上げられんと言うので、又々生れ処をお問がありまして是を申し上げればおのずから主名を明すような事で、故に天地の間と申し上げました、何はやお上を軽蔑いたすような申し分で重々恐れ入ります、だが何どのように仰せられ肉がたゞれ骨を砕かれても決して申し上げられません、毛頭覚えはございません」

と更に恐るゝけしき気色なきに御奉行も言い様がない。主名は明されん、武士道が立たんというに、

豊「吟味中入じゅろう牢申し付ける」

と此の下河原清左衛門が入牢を申し付けられたのは実に災難な

事で、なれども斯ういう柔和の人があるい或は毒を盛ったか解りません、
 是から何れも念いずに念を入れ、吟味与力も骨を折つて調べたがいつ
 かな云わん、誠に薄命の事で。是からお話が二つに分れまして、
 又娘のお筆は、どうも身に覚えのない濡衣ぬれぎぬで袂たもとから巾着が出て
 板の間の悪あくみよう名を付けられたからは、お父とつさんが物堅いから言
 訳を申しても立たない、誰たれにも顔を合されないから寧いっその事一と
 思いに死のうとこのうので、湯屋の裏口から駈出して小日向に参り
 ましたのは、祖父祖母じぶばの葬つてある寺は小日向台町だいまちの清巖寺せいがんじ
 で有りますから参詣を致し、夫それから又廻り道をして両国へ掛つて
 深川靈岸れいがんの寺じちゆう中えいきゆう永久寺へ参り、母の墓所へ香華かうげを手向たむけて
 涙ながら、

筆「もしお母様つかさん、誠に私わたくしは不孝者でございませぬ、お母さんつかには早くお別れ申して何一つ御恩も送らず小さい時から御養育をうけました大恩のある一人のお父さんとつを捨てすて、先立つ不孝は済まぬ事ではございませぬが、どうもお父さんの前へ面目なくってお顔が合わせられませんから、お父さんに先立つて今晚入しゆすい水致し相果てませぬ、草葉の蔭にお在いでなさるお母様にお目に掛りまして不孝のお詫を致しますから、どうぞお免ゆるし下さい」

と生いきたる母にも云う如く袖を絞つて泣き伏して居ますのがやゝ暫くの間で、其の中うちに最もう日が暮れかゝりましたから靈岸を出て、深川の木場を廻り夜の更よの更ふけるを待まつて永代橋えいたいばしへ掛りました。其の時空は少し雪模様になつてひゆうくと風が吹き往ゆき来も止つた様子、

当今なれば巡查がポカアリ／＼廻られて居るから飛込む事は出来ませんが、人通りのないのを幸さいわい欄干らんかんに手を掛けて、

ふで「南無阿弥陀仏／＼」

と唱えながら覚悟を極めましてばかり飛込みました。するとすーッと浮くもので、飛込むと丁度足が下へ着くとずっと浮く、夫それから又沈んでまた浮く、其の中うちにがぶ／＼水を飲んで苦しむので断末間だんまつまの苦みくるしをして死ぬのだと云う事で、沈着おちついた人は水へ落ちても死なぬと申します、彼あれは慌あわてると身体が豎たてになるので沈みますので身体が横になると浮上るものです、心の静しずかな人は川へ落ちてても、あー落ちたなと少しも騒がないで腕を組んで下迄すーつと沈むと又ずっと浮いて来る、処で水をかけば助かるというので

すが、然そう旨めいくは行ゆかん者もので、お筆ひしは二度目ににずつと浮上うつた処ところへ、永代えいだいの橋はし杭ぐいの処ところへずつと港板みなといたがなんんが知しりませんがそれと云いつて船頭せんとうが島田しまだ鬻うを取とつて引上ひげました。

船頭「まだ宜ようござえやす息いきがあります」

客「まだ事は切きれない、もう少ちし此方こちらへ入いれてくんな、濡ぬても宜よい、大方たうほう然そうだらうと思おつたが全ぜんく死し後ごれたに違ちがいない、彌助やすけお前まへ其処そこを退どきな、何か薬くすりがあつたらう、水みづを吐つかせなければならん」

と大騒おほさわぎ、大勢たいせい寄よつて集たかかつて介抱かいぼうしたから、お筆ひしは漸やつつと氣きが付ついて見みると屋根やね船ふねの中うちでございます、それに皆知みならん人許ばかりでございりました、見みると其その儘まま泣な伏ふしますを見みて共ともに涙なみだを拭ぬいます客

は、夫婦連れと見えて、

主「やア是はおとみじゃアない」

妻「おやく／＼私は着物や帯の模様が似て居たから必然^{てつきり}おとみだと思つたら、着物の紋が違つて居る」

主「おゝ然^そうだ、誠に何^どうも：まあ気が付いて宜かつた、何しろ気の毒な事だ、もし姉^{ねえ}さんお前何ういう訳だえ」

筆「はい、何うぞお見逃しなすつて下さい」

主「見逃せたつて何う見殺しになるものか、船の港^{みよしばた}板端へ、どぶんと音を聞いたから船頭に引揚げて貰つて介抱した処が気が付いたので安心致しましたが、もし姉さんまアお聞きよ、そりや能^{よく}々の事だから身を投げたのであろうが、見逃すという訳には

往かん、まア私の家は浅草の福井町だから：何う云う事か家へ
 帰つて緩りと事柄を聞きましよう：あれさ然んな事を云つても姉
 さん打捨つて置く訳にはいかぬ」

筆「それでもどうぞお見逃しなすつて」

主「そんな事を云わずに姉さんまア心を落着けなさい」

筆「はい、是には種々訳があつて死なねばなりませんので」

主「夫は種々訳もあろうけれど兎に角、そんな事を云つても誰
 でもそんなら死ぬが宜いと手を放して見すく飛込ませる訳には
 いかん」

妻「まア一旦私の家へお出でなさい、気を沈めて此のお薬を服
 んで」

と夫婦の介抱で漸く気は落着きましたが、

筆「何うも生きて居おられませんが、深い訳の有ります事故ゆゑ何卒助け
おぼしめると思召して殺さして下さいまし」

主「助けると思つて殺させる者はない、其の訳は緩ゆつくり聞こうか
 ら兎も角わし私と一緒にお出でなさい」

と漸くに船を急がせ石いしきり切河岸へ船を附けて、浅草福井町の米
ねくらやまごえもん倉屋孫右衛門と申して奉公人の二三人も使つて居ります可なりの
 身代の人でございますが、自分の家うちへ連れて参りました。

孫「これ何を呼びなよ、あの金太きんたをそうして表へ錠おろを下すのだ
 よ」

奉「へい夫それでも駈出すといけませんから」

孫「駈出す氣遣きづかいはない、大丈夫だよ、さア姉さん此処こゝへお出で：あのおよしや御仏前へ線香を上げてなアもうお線香が立たない様だから、香炉の灰を灰振はいふるいで振ふるつてお呉れ：見れば誠にお人柄みづめの容姿形も賤しからん姉さんだがお屋敷さんか、どういふ処にお在いでゞ、何ういふ訳があつて身を投げたか、それを聞かせて下さい、親御も嘸案さしてじて居ましよう、能く考えて見なさい、両親を残してお前様さん、先立つて死ぬというのは無分別と申す者で、同きようだい衆も御親類でも何んなに心配するか知れん、何ういふ事があるかは知らんが、何なんの死なゝいでも宜よい事と人に笑われる事の有るもの、歳ゆの行かん内は分別なしで困るものさ、実にそれは後あとに残る御両親のお心根をお察し申します、其なげの歎なげきは何どの位だか

知れませんよ」

筆「はい、何うも御親切に有難う存じますが是には種々深い訳がありまして、名前住所ところは申し上げられません、どうぞお慈悲と思召してお見逃しなすつて下さい」

妻「まあ然そんな事を云わずに何うか其の訳を聞かせて下さい、私も娘の行方が知れなくなつて、それがまあ実は家うちに居た手代の金次郎きんじろうという者と、まあ誠にお恥かしい事だけでも悪い事をして、親にも申し訳がないというので死ぬ氣になつたと見え、二人共家を出で昨日きのうまで行方が知れませんが、処が金次郎の死骸だけは分つて鉄砲洲てつぱうずで引揚げましたから金次郎の親の家が芝しばの田町たまちでありますから旦那と私と行って是々と話すと先方むこうでも一方ひとかたな

らん歎なげきではありましたが、まだ私の娘の死骸が分りませんので諸方てわけへ手分をして捜している内、何処どこ其処そこへ斯こういう死骸が流れて来たなど、人の噂を聞き、船で彼方あちら此方こちら捜して永代の橋の処まで来ると、今飛込んだ娘があるというから、実は自分の娘と思つて慌て、船頭に頼んで引揚げて貰つた処が、お前さんまア歳頃といひ私共の娘と同じ形なりの小紋の紋附帯も矢やっぱり張紫繻子てつきりわがこ必定我子と思いましたが、顔を見れば違つているから、実は落胆がっかりしましたが、娘を持つ親の心持は同じ事で、嘸さぞお前さんの親御も案じてお在いでだろうから、何事も打明けて仰しやいました」

と親切に言われて、お筆は唯泣いて居りました。

四

お筆は漸々ようく顔を上げまして、

筆「御親切は有難う存じますが、是には深い訳がございまして、親共に顔向の出来ない事で、何卒どうぞお見逃し下さい、親共は堅い気性でございまして、此の儘帰れば手打に相成ります、それも厭いといけませんかえが却なまじつて懨なまじい立腹をさせるよりは今一ひと思おもいに死んだ方が宜いと存じますから……」

孫「そんな解らん事を云つて困るよ、お父とつさんが手打にすると
いうのは夫それはほんの嚇おどしで、能く然そんな事をいう者だが、私共の
ような者でも一人娘が時々心得違いの事でもあると、只たった一人の娘

でも叩き出すというが、お侍が手打にするというのと同じ事で、決して本当に手打にしたり、叩き出したり出来る訳の者ではない……これ時ときぞう藏は帰ったか何うも知れないか」

時「へえ、王子あちらの方でも、何うも彼方あちらへ入いらつしやいませんそうで彼方でもお驚きで、何れいず此方こちらからお訪ね申すという事で」

孫「夫は困ったなア、あの瀧たき二郎じろうは帰つて来たか」

瀧「へえ、只今帰りました」

孫「何をマゴくして居るのだ早く此方こつちへ来て知らせて呉れないでは困るなア、何うだのう、知れないか」

瀧「へえ、伊皿子台いさらこだいの方へもお出でがないって、何うもお驚きで誠に飛んだ事でお仕合せな事だと斯こう申しました」

孫「何がお任せだ、何なんだか解らん口上ばかり云つて……まアも一度本気になつて迷まいご児を尋ねに出て貰いたい」

瀧「迷まいご児どころではない、もう十八になつた娘でございませうから迷まいおや親で」

孫「誰だ、そんな悪わるくち口をいうのは」

御主人は立腹致す、大騒さわぎで、是から八方へ手を分けて尋ねまする中うちに、築地の方へ流れて来た死骸は是々だというから直すぐに行つて見ると全く娘の死骸でございませうから、直に検視を願つて漸く家うちへ引取つて、野辺の送りを致すやら実にひつくりかえ転覆ひつくりかえるような騒さわぎ、それで段々延のび々くになつて彼の娘かの事をきく間まもないほどの實まじに一通りならん愁傷しよなぬかで、先初まず七日しよなぬかの寺詣りも済みましたが、

娘は駈出そうと思つても人が附いて居るから、又駈出して愁傷の処を騒がせて厄介を掛けては氣の毒と思つたから、奥の狭い処へ這入つて只此処こゝの親達の心を察しは泣き、自分の親も嘸案さざてじて居るだろうと心配しては泣き、見るにつけ聞くにつけても涙ばかり、漸く二七日にしちにちも済みましたから、

孫「どうも大きに御苦労だつた、今度は変死の事だから寺詣りも何も派手には行かず、碌々他に何も致さんが、何れ仏いざの為には功德をする積りだ……あのなに何なんとか云つた、あの娘この名よ」

妻「まだ申しませんよ」

孫「困るのう、何とか云つて呉れ、ば宜いいに、何うしても云わんかえ、是へ呼んでおくれ、婆さんお前に昨夜ゆうべ云つた事を得心す

るだろうか、まア姉さん此処へお出で、泣かなくつても宜い、実に私が泣きたい位だ、少し察しておくれ」

筆「はい嘸段々お淋しゅうございましょう」

孫「いやもう只た一人の娘を失してまるきり暗夜になつたよう
で、お前さんを見ると思い出します、然しまア私の娘の方は事が
分つて、斯うやつて二七日も済ましたが、遂々娘の事ばかり思
つて居て、お前様の事を聞くのも段々延びたが、何うかお前さん
の身の上を打明けて呉れないと困る、ねえ二十日も三十日も人の
娘を只預かつてお前様の親御に申訳ない、只駈出した訳でない、
何れ仔細あつて出た事であろうから親御の心配と云う者は一方な
らん事で、お前が明らさまに云つて呉れないと何うも困るねえ」

筆「はい」

孫「何卒どうぞ云つて下さい、ねえ私も斯こうやつて愁傷の中だから心配を掛けて下さるな」

妻「本当に旦那の云う通り、して若い中うちから余り丈夫でないから今年五十四になつて、殊におとみが彼あいう訳になつてから、なおくヨボくして来てねえ、然そうしてお前のお父とつさんの処へ送り届けなければならぬと心配して居ますが、只たつ一人の娘を失なくしたから何なんならお前うちさんを家の娘に貰ういたい位で、何しろ話して下さいな」

とだんく親切に夫婦が尋ねますからお筆は、胸に迫り、縷じゆばの袖で涙を拭きながら、

筆「はい、はい、誠に御心配を掛けて済みません、それでは申上げますがわたくし私は築地小田原町に居りまする下河原清左衛門と申す浪人ものゝ娘でございます」

孫「なに下河原、フム御浪人だね、築地小田原町で……お母つかさんもお達者かえ」

筆「いえ、わたくし私が四つの時に亡なりました、親父の丹精で是までに成長致しました」

孫「おゝそれでは尚更案じて居ましよう、早くお知らせ申さなければいけない、これよ時藏や」

時「へえ」

孫「えー築地小田原町で何なんとか云つたのう、うむ下河原清左衛

門と云うお方だ、其の娘でな……お名前は何とお云いだね」

筆「ふでと申します」

孫「まアおふでさんかえ……お前一つ下河原さんへ行つて、実はお娘むすめ子のおふでさんが永代橋から身を投げた処を助けた処が、何うしても名前を云わないでお届け申す事が出来ず、其の中私わたくしの方でも愁傷なの中で取紛れて、存じながらお訪ね申さなかつたが、段々とお尋ね申した末に、漸くお名前も知れたから早速お知らせ申すが、御無事でお在いだから御心配をなさるな、明日此方みょうにちからお娘子を連れて参るから前以てお知らせ申すと早く行つて来な、あゝ申しお家主の名は何と申なんしますえ」

筆「はい金兵衛さんと申します」

孫「町役人ちやうやくにんは金兵衛様きんべゑさんというのだよ、大急ぎでなア」

時「へえー」

奉公人は駈出して参りましたが暫らく経つて夜よに入つて帰つて参りました。

時「へえ只今行つて参りました」

孫「あゝ御苦労だった、分つたかえ」

時「へえ解りました」

孫「親御様おんごさんも嘸案さぞじて居たろう」

時「それが其の親御がお娘子を捜しに出たきり行方が知れませんとするので」

妻「此の姉さんのお父とつさんが」

時「へえ、家主おおやさんが大變に案じてお在いでゞ、其のお父さんが、
 只たつた一人の娘を失なくし今まで知れないのは全く死んだに違ちがひない、
 最早樂しみもないから頭を剃かつて廻かい国こくするといふ置手紙を残し
 て居いなくなつて仕舞い、諸道具も置形見にして行きましたと云つ
 て家主おおやさん様も大變心配して居た処へ、此方こちらから知らせたので夫婦
 共に大喜びで、どうも有難い、決してお出でには及びわたくしません、私
 の方から引取に出でます、今晚遅くとも上あがりますといふ事でござ
 います」

孫「それはく親切いえぬしの家い主ぬしさんだ」

筆「え、夫それではお父様とつさまは剃髪して廻い国こくにでもお出いになりまし
 たか」

と泣倒れます。

孫「それだから早くお前さんが然そう云えば宜いいのに、今になつて然そんな事を云つても仕方がない、家主が引取に来ると云うから、御酒ごしゆの一盞ひとつも上げなければならぬから其の支度をして置きなさい、肴も何か好よい物を取つて置くが宜よい、なに然そう泣いて居てはいけない、お父様とっさんが頭を剃つて廻国をすると云つて行方知れずになり、お母つかさん様も親類もなくお前さん一人に成つて、他に兄弟衆もなく心細くもあろうから、私の処へ居て、是も何なんその因縁と思つて家の娘うちに成つて下さい、まあ然そんな不自由もさせないから、お前を貰つて堅い養子を貰みいたいが、私の子に成つて何なんうか死し水ずとつて貰みいたい、築地のお家主にも話を仕ようが、どうか得

心して下さいいな」

妻「わたくし私も然う思つて居ますよ、ねえ姉さん此の儘にずるずるべ

ツタリ家の娘うちに成つてお呉れなら養子をして安心を致しますから、
何卒どうぞ然うして貰い度とうございます」

孫「まア女は女どしだからお前の処へ連れて行つてゆっく緩り話をし
なさい」

妻「はい、さアお前こちら此方へお出で」

と孫右衛門の妻が是から次の間へ連れて行つて種々いろく娘に迫る
から義理にも厭いやとは言われません。

筆「はい、いずれ考えまして御挨拶を申しましょう」

と云う内に参りましたのは築地の家主金兵衛で、

家「御免下さい」

奉公人「誰方どなただえ」

家「築地小田原町の町役人山田金兵衛と申す者で」

奉「入いらつしやいまし、此方こちらへお上あがりなすつて何うか、旦那小田

原町のお家主金兵衛さんが入いつしやいました」

孫「おそれ、夫はまア、此方へどうか」

家「へい始めまして、えゝ家主山田金兵衛で至つて不調法者で

不思議な御縁でお目に掛ります、幾久しくお心安く願います」

孫「はい、始めまして米倉孫右衛門と申す疎忽そこつもの者でお心安う

願います、これ布団を出しな、烟草盆にお茶を早く…さア何卒どうか此

方へく」

金「もうお構い下さいますな、誠に此の度はたびどうも御親切に有
 難う存じます、私も心配致して居りましたが店子の者で親子二人
 暮して居りますが、其の娘が至つて孝行者で寝る目も寝ないで孝
 行をして居るを気の毒に存じ他の店子と違つて私も丹精を致して
 居りました処でまア詰らん事の災難で……全く其のお筆と云う者
 が桂庵の婆ばアの中着を盗とつた訳では有りません、実はその婆が妾奉
 公に世話をしてやると云つたのを、お筆の親が侍の事で物堅いか
 ら、怪けしからん不礼ぶれいな婆だと悪口あっこうを申して帰しましたのを遺恨に
 思つて、企たくんでされたと云う事も直すぐに分つて、決して人様の物を
 取る様な娘ではないので誠にどうも飛んだ災難で、お筆は一途いちずに
 残念に思いました処から、駈出して入水致したを、お助け下さい

ました趣おもむきで有難う存じます、それに亦またお宅の嬢様も御逝去おなくなり
 と承りましたが嘸さぞ御愁傷で、七日の朝築地の波除なみやけぐい杭の処へ土左
 衛門が揚つたと云うので、私も思わずお筆の死骸と存じまして跣は
だし足で箸と茶碗を持って駈出す様な事で、行つて見ると小紋の紋附
 に紫繻子の帯を締めまして赤い切きれを頭へ掛けて居りまして、お筆
 ではないかと存じしましたが、それが此方のお嬢様の御死骸と只今
 承る様な事で」

孫「成程それはく誠にどうも」

金「え、其のお筆が居りますなれば私わたくしが逢い度たいもので、是へ
なにとぞ何卒お呼びなすつて」

孫「誠に間が悪がつて、貴方にお目には掛れないと云つて居り

ます」

家「なに然そんな事は有りません、これお筆さんや何なんでお前まへどうも困るじやアないか」

孫「まア其そんな様に大きな声をなすつては却かえつていけません、これ婆おばア此こゝ処へ連れてお出で〜」

妻「さア此こゝ処へお出で」

と孫右衛門の妻に連れられてお筆は面目なげに泣きながら出て参りまして、顔も上げ得ませんで泣伏して居ります。

家「お前まへまア、何どういう訳でそんな軽かるはずみ率すゑな事をしたのだえ、

無分別の事ではないかえ、私に言い悪にくければ家内いけにでも云つて呉れ、ば此こん様な事にはならないものを、親父おやさんは一人の娘が入水

を致したからは此の世に何一つたのし楽しみはないと置手紙をして世帯道具も其の儘置去りにして行方知れず、だが又帰る事もありましよ
うから親御の帰るまで私の家へうちお帰り、面目ない事は少しもあり
ませんよ、何時迄も此方こちらにお世話になつて居ては濟まん事で、さ
ア、私わしと一緒に帰んなさい」

筆「はい」

孫「あゝ申し、就きまして貴方に折入つてお願ねがいがございしますが、
此のお筆さんは今は親の無い身の上で何処どこへ参ると云う見当あてもな
い事で、親御の御得心の無い者を私の娘に貰たい度たいとも申されま
せんが、お前様さんが御承知下されば何うも此の娘こを私の娘むすめにし度たい
と思おもいますが、是が深い縁ゆかりがあつて助けたのだと家内も申して居

りますので、私は他に子供がないから、何卒此の娘を貰つて養子を仕様と云う積りで、親の承知の無い者をお貰い申すと云う訳ではないが、貴方から下さる様に茲は貴方が親御に成つて下されば宜いが、手前此の娘に決して不自由はさせません積りで、へい奉公人も大勢使つて居りますが其の中に好い心掛の者がありますから是を養子に貰おうと存じて居りました処、一人の娘が彼アいう事に成りましたので此の娘を助けて連れて帰りましたが、僅内に居ります間も誠に親切にして真の親子の様にして呉れまして、何だか可愛てなりません、是も何その縁でございましたら、どうか貴方が親御に成つて此の娘を下さる様な訳には行きませんか」

家「成程至極御ごもつとも尤もの儀ではございませうが、別段私わたくしが其そのの親から頼みを受けたということもなし、世帯道具を残らず置いて娘の行方を尋ねに参つた事で又帰る様な事に成りましようから、何どうも私わたしが得心の上で差上げる訳にも成りません、手前の方でも又少し夫それはねえ、もしお筆さん、夫もあるものだから直すぐに此方こちらの娘と云う訳にも行ゆきませうと存じます、是はそうも然そう参りませんなア」

孫「左様ではござりませうが、ねえお筆さん私が折入つてお願ねがひがどうかね、是も何かの約束と思つてまア、私の娘に成つて下さいなね、夫婦とも子のない身の上でどうか願ねがひたいが、のう婆ばあさん」

妻「どうかねえ貴方が御得心で親御の行方が分る迄も此方へ居て貰うようお願い度いものでね」

と夫婦が種々に折入つて頼みますが、金兵衛は其の実はお筆を連れて帰り、自分の甥の嫁に致したい心底ですから困りまして、金「でもございませうが何でございます、其の事に付いて種々訳のある事で、私も一通りならん心配を致しましたから一旦連れて帰つて家内に面会させまして其の後の事に致しましょう」

孫「夫は至極御尤の事でございます、が何うかまア御無理だが是非願ひ度い、せめて親御のお帰り迄お預け置き下さい、此の子も御縁あつて私の処へお出でに成つたのですから親父さんがお帰りになりましてから其の時お帰し申しても又御承知の上で此方へ

更あらためて戴くと云う様な事に致し度いもので、どうかなア其そこ処は貴方が御承知を願ひ度いものでございます」

金「その一体其の何どうも私共が兎や角と云う訳ではないが、私の店子でございまして店子と申せば子も同様の者でございますから実は其の私の方で引取るのが当然の訳で清左衛門の文面の様子でも帰る様な事で見れば、又帰りました上で清左衛門へ話も致しませんが今晚の処は連れて帰ります」

孫「さようでは有りましたようが兎も角親御のお帰りまで貴方御得心でお預け下さいます様に願ひ度いもので」

金「夫それは何どうもねえ、お筆さん其そこ処は当人の了簡も聞かなければなりません、私が兎や角拒む訳はないが、へえお筆さん、ど

うしたもので」

孫「もう夫は家内と確しつかり相談して見ると親兄弟もない身の上だから然そう云う事にして呉れ、ば私も命を助けられた恩返しに孝行を致したいと此の娘こも申します」

金「それは然うあるべき訳でございますけれども、私も随分お筆さん様を丹精致した事は中々貧苦のなに貧乏と申す訳ではありませんが、まア困つて居る処を私が余程肩を入れて内職を教えたり種々いろくにして、まア斯こう云う訳に成つたので、どうも私一人が得心する訳にも行いかんからお筆様、お前が是しつを確かりして此の挨拶をしてお呉れ、私の家内にも一旦相談して見なければならぬがお前さんはまアどう云う心持だえ」

筆「誠にもう何なんとも申訳はございませぬ、貴方のお家うちへも濟み
 ませんが、此方こなたさま様でも命をお助け下さったのみならず種々しゆ／＼御心配
 を掛け、殊には私と同じ様なお嬢さん様も入水を成さつて相果て、此
ちら方の御両親のお心持をお察し申しますと誠にお気の毒様で、どう
 も是程に不束ふつゝかな私を、あゝ仰しやつて下さりますものを無にも
 致されませぬから、それに大恩のあるお兩人ふたり様でございませぬから
 親父の帰る迄此方こちらさま様の御厄介に成つて私も居ります積りでござ
 りますから左様思召して下さいまし、何れいず其の中御家内うち様へお目
 に掛けてお詫を致しますから、どうか貴方から宜しゆう仰しやつ
 て下さいまし」

と涙を拭きながら申しますから

金「どうも然そう云う訳ですか、じゃア、まアお暇いとま致いたしまし
よう」

と金兵衛もお筆が申すので仕様がなから、ブツ／＼云いなが
ら立帰りました。是が縁で此のお筆が此いの家えの娘になりましたが、
誠に不幸の人で再び大難あに遇くう条だ一ち寸よ一息つつきまして。

五

え、米倉屋孫右衛門の家では、二月の十日が娘の三十五日で
谷中静雲寺せいに於おて、水死致した娘の事で有りますから、猶更ねん懇ご
ろに法事供養を致しました。すると其の年の八月此の米倉屋孫右

衛門の家内おゆうが四十七歳で死みまかり去まりました、重ね／＼の不幸のみならず、娘の入水致した時などは、余程入費ついやも費つしました事で、引続いて種いろく々の物入ものいりのございしましたので、身代も余程衰えて来た処へ、其の年の十一月二十九日の日ひに粉倉もみぐらの脇から出火で福井町から茅かやちよう町二丁目を焼き払った時に土蔵を落して丸焼に成り、米倉孫右衛門、神田三河町に立退きまして商売替を致し、米商売を始めました処、案外の損を致しました、然しかるに又宝暦の六年は御案内の年代記にも出て居りますが、江戸の大火で再び焼失致しましたから遂に身代限りを致し、何どうも致いたしかた方がないから僅わずかの金を借りて京橋の鍛冶町かじちようへ二間間口の家を借り、娘に小間物を商こあきないなわせ、小商こあきないを致して居うちります中に、余り心配

を致したのが原因もとに成つて孫右衛門は病の床に就つきました、娘のお筆は大切に看病を致して居りますが、誠に不幸な人でございまして、死ぬ処を助けられて宜よい処へ行つたと思うと其の家が零落を致し養母には間も無く死しにわか別れ、親父は病氣に成つて其の看病を致しますが、一体孝心の娘でございまして、店で商いを致しながら父の看病を怠おこたりなく致します故か、孫右衛門の病氣も怠つた様でございまして、頓と身体が利きません、先ず中氣の様に成りました、仕方がないから家主藤兵衛とうべえへ相談の上、店を仕舞つて裏屋住いに成り、お筆が僅の内職を致しますが居立いたちの悪い親を介抱致しながらでございまして、内職を致す間まも碌々まございません、親父が寝付いた間まに内職を致すのだから何程の工こう銭せんも取れ

ません、売り喰いに致して居りましたが、末には、何うも致方が
 ない、あなた読者がたは御存じがありますまいが、貧乏人の身にある事
 で米薪が切れる、着物が切れる畳が切れる、其のぼろを隠すのは
くるし苦しいもので有ります。お筆はお米を買う事が出来ないから、自分
 が喰べずに米櫃こめびつを払つてお粥にして父に喰べさせても、己おのれはお
なか腹が空いた顔を父に見せません、近処でも是を知つて可哀想に思
 つて居りますが直じき其の裏に五斗俵ごとびょういち市と云う人がございます。
ちやぶね茶舟の船頭で五斗俵ごとびょうを担ぐと云う程の力の人でございます、
そこ其処の姐御あねごは至極情け深い人で、然そう云う強い人の女房でござい
 ますから鬼にようぼの女房きじんに鬼神たとえの譬、ものゝ道理の分つた婦人で有りま
 すから、お筆を可愛がつて居ります。

女房「おい、勘次かんじや、お前あのお筆さんの奥のお筆さんの処へ序ついでに水を汲んでやんなよ、病人があるから定めし不自由だろう、何かお菜かずを拵こしらえてやろうと思うが、手一つで親の看病をしながら内職をして居るので、何もする事が出来ないだよ、可哀想だから目をかけて遣やんなよ」

勘「え、姐さん目をかける処どころじゃアない、何時いつでも井戸端へ行くとア、水を汲んでやります」

女「焼豆腐を煮てやりたいと思うが、勘次、お前出来るかえ」

勘「え、出来ますとも私わっちが煮て上げましょう」

女「お前に煮られる者か」

勘「煮られなくって、七輪を此処こゝへ持つて来やしよう」

女「そうだねえ、まア火を煽おこしてお呉れ……消炭けしずみを下へ入れて堅い炭を上へ入れるのだよ、あら、鍋が空じやアないか、湯を入れて掛けるのだアね、旨くやんねえよ」

勘「宜ようげす……それ七輪の火が煽おこつて来た……徐々そろく湯が沸立にたつて来たぞ御覧ごらんじろ今に旨く煮てやるから一寸ちよつとお塩梅あんばいをしよう」

女「おい、お前が何も塩梅あんばいしなくつても宜いい、然そうバタ／＼七輪の下を煽あおがないでも宜いいよ、お前のは他見わきみばかりして居るから、上の方で灰ばかり立たつて火が煽おこりやアしない」

勘「なに、大丈夫だ今旨く煮て見せやす、ねえ姐さん／＼」

女「何なんだい」

勘「裏のお筆さん位い美いい女は沢山たんとはありませんねえ」

女「あゝ美しい嬢だねえ、人柄がいゝねえ」

勘「女が美しくつて人柄が宜い上に、一寸気が利いて、親孝行で、あんな好い娘はありませんぜ」

女「可哀想にあの位の器量をもつて……」

勘「ありやア姐さん、親父さんが死んで仕舞うと却つて助かりますぜ」

女「そんな事を云いなさんなよ」

勘「あの親父は堅いから喧しいが親父が死んで仕舞えば旦那でも何でも取れます、あれで軟かい着物でも着せてお化粧をさせて置いて御覧なせえ、そりやア素敵なもんだ、親父はもう、直に死にますぜ」

女「馬鹿な事をお云いでない、只たつた一人のお父とつさんが逝去なくつた日には本当に可哀あはれそうだ」

勘「なに死ねば宜いいや、兎も角も美いい嬢こですねえ」

女「真ま実とに宜いいのう、愛あらしいこと、人ひと柄がらで恰まるでお屋敷さん

のお嬢さん見たようで、実に女でも惚おぼれ／＼するのう」

勘「姐さんでも惚おぼれますかえ」

女「お前水を汲くんでやんなよ」

勘「汲くんでやる処ところじゃアない、お筆さんが井戸端へ行くと跡あとか

ら飛とんで行いつて汲くんでやるので、此こ間ないだも佐吉さきちの野郎やんが水みづを汲く

で喧嘩けんかをしやした、恰まるでお筆お筆さんは手てを下おろす事こともないが、佐吉さきちの

野郎やんが助すけ倍べいな奴やつで、お筆お筆さんだと大騒おほさわぎやつつて汲くんでやりやア

がつて井戸端へ洗濯屋の婆さんが来て私にも汲んでお呉れという
とね、佐吉が井戸を覗き込んでいゝ塩梅に中に水があれば宜いが、
と井戸に水のねえ訳はねえが現金な野郎で：何しろ好い女だ、親
父が死んで仕舞うと旦那を取るよ、親父が死ぬと彼方此方で世話
をする者があると死んだ親父に済まないから旦那なんぞを取るの
は厭だと云うねえ、それを強て勧めるから旦那を取るけれども若
い好い男は取らないねえ、何でも六十三四位の金のある奴を勧め
ると屹度旦那に取りませぜ」

女「どうだか知れやアしない」

勘「なアに取りますよ、取るけれども彼ア云う気性だから旦那
に金を遣わせないね、大きな家へも這入らない、新道で一寸八

畳に六畳位の小さな土蔵でもある位な家を借りて居るね、下女は成丈なりたけ遣わない、自分でお飯まんまを焚いたり何かし為ますそれで綺麗好だから毎朝表の格子を拭きますよ、其の時其の前を私わっちが通り掛つたら、何どうだろう」

女「誰だれが」

勘「私わっちさ、扮装なりこしらを拵こしらえるね此こん様な扮装いでたちじゃアいけないが結城ゆうきつ緬むぎの茶ぢの万筋まんすじの着物まに上うへ唐とうざん棧らんたつの縞はの通とし襟はの半はん※てんを引掛ひつかけて白木しろぎの三尺さんでもない、それより彼あの子こは温おとなし和わい方が好きすきですかねえ、草履くわより駒下駄こまげを履はいて前まへを通とりましようお筆ねえさんが見みると屹度いど声をかけますよ、おや勘次かんじさん、おや姉ねえさんお宅たくは此こ処こですかえ、はア斯こんな処こへ来きました、まアおよんなさいよお茶

を飲あがつて行つてお呉んなさいよと先方むこうで云うに違ちがひない、義理堅い娘こだから、水や何か汲くんでもらつた廉かどがあるからお上あがんなさいましよと云うねえ、此処わっちで私が旦那でもお在いでだとお邪魔まじに成るからと云うと、いゝえ誰も居いませんから、まアお上あがんなさいましよと手を取つて引張ひるね、寄よりたいけれども其の時やア私は我慢まんして、何いれ又ずといいうので無理むりに振ふり払はつて帰かるね、二度目にに通とる時に又おつな扮装なりをして今度こっちは此方こっちから声こゑを掛かけると、まア上あつてお呉あんなさいと引張ひり込こんでお茶ちやを入いれる、家うちに酒さけも附ついて居いるから一寸お一つ召めし上あれと私の酒さけ好きずきを知しつて居いるから、氣きが付つく子こだから酒さけを出だす、これは濟すみませなねえ、旦那だんなは毎まい晩ばんお出ででななさるかかと聞きくと、いゝえ毎まい晩ばんは来きませなん通とい番頭ばんとうで年としを老とつ

て居ますから、月に漸く三度位しきやア来ません、時々遊びに参
 っても宜うございますか、宜いどころじゃありません、どうぞ
 始終遊びに来て下さい、姐ねえさんはお壮健たっしやですかとお前さんを聞
 くよ、情愛があるから……それから屢々ちよくく遊びに行つて何時も
 御馳走に成つて済まないと偶たまには何か奢つてやるね、度々たびく行く
 様に成るとそこは阿漕あこぎの浦に引網ひくあみとやらで顕あらわれずには居ない、
 其の番頭が愚図く云うに違いない、然そうすると私が依怙えこじ地に成
 つて何を云やアがる此方こつちじゃア元より一つ長屋に居たんだ、確乎ちやん
 と約束がある女だ、誰たれに断つて此の女を慰み者にして居ると威張
 るね：いや然そんな事を云うと彼の娘こが驚いて愛想をつかすといけ
 ねえから：なに構わない向うは歳を老とつて居るから威おどして先の家うち

へねじ込んで仕舞えば然そんならばと云うので、手切れに成る」

女「何なんだえお前、何でも無いのに手切れが取れるものかね」

勘「今はまだ何でもありませんが今に成るねえ、併しかし然やかまう喧やかましく掛合つてもあの子が心配をするから、其そこ処は旨く話合いにして百両取るよ、然うしたら私わっちは質から出したい着物がある、そうなるとお前さんに芝居を奢りますね」

女「勘次お前気が違つたのかよ」

勘「だって本気です、七輪の火がおこらねえが」

女「其の筈よ猫の尻あおを煽あおいでるぜ」

勘「シ、猫め彼方あっちへ行ゆけ、是れは恐れ入った、姐ねえさん今に煮えたら直すぐに持つて行きましょう」

と交々かわる／＼、近所の者がお菜さいを持って往ゆきますから、喰物たべものに不自由はないが肝心のお米と炭薪などは買わなければなりません、段々に冬に成る程詰あつて参り、遂には明日あすのお米を買あつて親父にたばさせる事も出来なくなりました。

六

お筆は何うしたら宜よろかろうと種々いろ／＼考えましたが、斯こうなつては迎むかへ致とし方がないから、能く人が切羽に詰あつた時には往來の人ひとの袖すそに縫ぬう事も有ると聞いた事もあるから、袖そで乞こいに出る氣に成りましたが、あゝ恥かしい事では有るが親の為には厭いとう処でない

が袖乞をする事がお父さんに知れたら猶御心配をかけるようなものだと種々に考えまして親父の寝付いた時分に窃そつと抜け出して数す寄屋きやがし河岸の柳番屋の脇の処に立って居りました。寒くなると人の往來ゆきは少のうなります、酒臭き人の往逢ゆきあう寒さかなという句があります、たま／＼通る人を見ても恵めぐみを受けようと思ふ様な人はさつぱり通りません。お筆は手拭かぶを冠かぶつて顔を隠し焼け穴ふだらけの前掛に結びつ玉だらけの細帯を締めて肌着いが無いから慄ふるえて柳の蔭に立って居ると、丁度此こゝ処ゝへ小田原提灯を点けて二人連れで通り掛つた者がありますから、

筆「もし貴方」

と言掛けましたが是は中々云えんそうでございますが実に慣れ

んに御心配をかけては御病氣にも障る事で何分にも他に何を致そうと思つても手放す事が出来ず、暗夜やみよの事だから人に顔を見られなければ親の恥にも成るまいと思ひ、もう一生懸命で怖いも何も忘れて仕舞い、

筆 「貴方お願いでございます」

○「ア、何なんだだい突だしぬけ然びつに恟こりした、どうも此こ処ゝ等らへは獺かわうそが出るから……」

筆 「永々親父が煩ごれんいまして難どうぞ洩致します、何卒親子の者を助けると思召して御憐愍ごれんを願ねがいます」

○「然そんなら早く然そう云いえば宜よいのに吉田さんく、袖乞た一寸御覽」

と小田原提灯の火影ほかげで見ると

「中々いい美しい女だ繻絆いを着ないで薄いあわせ袷見あた様な物を着て何どうも
気の毒な事だの」

△「成程是は美しい素敵ねえだ姉おとつさん親父おとつさんは余程悪いかえ」

筆「はい永い間病気で」

○「困るだろうねえ無むじん尽を取つて来たから……取つて来たつて
割返たんとしだよ、当れば沢山たんと上げるが只たつた六十四文ほきやアないが是
をお前に私わしが志しで」

筆「有難う存じます」

と金を貰つてしくしく泣ないて居りました、此の為ていたらく、体たいを見て一
座の男が、

甲「ア、泣くよ本当に嬉しいのだ、真に喜んで泣くよ偽乞食にせこじでないから、お遣りお前は小花こばなの鬮くじが当たったから皆みんなお遣りよ何を愚図ぐずして居るのだ」

一人の男が不承／＼に出すを受取つて、

甲「さア此の人のだ二朱と二百上げるよ」

筆「有難う存じますく」

男「何うしても二朱と二百の方が礼が多い、だがね、姉さん此の男のは小花が当つて余計ものですが、私のはたった六十四文でも割返しだから、丁度二十両の内に這入つて居る者だから私の方は親切せつせつが深い」

乙「そう自分許ばかりいゝ子になりたがらなくつてもいゝぜ」

と錢を恵んで呉れましたのは天の助けで、それから又翌晩も出て是が三日四日続くと、もう幾らか様子を覚えましたから通り掛つた人の袖にすがりましてお願いでございませうと、其の人は悔りして、

男「何なんだい、悔りさせやがる」

筆「親父が永々の病気で、難渋致しますから何卒どうぞお恵みを……」

男「ア、美よい女だ美こい娘だねえ、五百やるから材木の蔭へ這入らないか」

などという悪い奴が中には有ります、お筆は驚いて御免遊ばせと云つて逃出しましたが、段々寒くなるに従つて人通りがなくなり、十二月の月に這入つてヒユウ〜と云う風が烈しいから夜よに

入ると犬の吠える許りばか、往来は絶えて一人も通らんから、もう仕方がない私の様な者でも人様の云う事を聞けば五百文でもやると仰しやるが、身を売つてもお父さんとつを助けたいけれども、私が居なければ介抱をしてもなし、お父さんに御飯おまんまをたべさせる事も出来ないから、身を売る訳にも行かずゆ、進退谷きわまりまして誰たれにも知れる氣遣いがないから、思い切つて、身を穢けがしてもお錢あしを貰つてお父さんに薬も飲ませ、旨い物を喰べさせて上げたいと可哀想にわずか僅五百か六百の錢ぜにの為に此の孝行の美婦人が身を穢しても親を助けようという了簡になりましたのは実に不幸の娘であります。九ツも過ぎ、芝の大鐘おおがねは八ツ時でちらりくと雪の花が顔に当る処へ、向うから白張しらはりの小田原提灯を点けて、ドツシリした黒くろら

羅紗しやの羽織しおりに黒縮緬そうじゅうろうの宗十郎頭巾そうじゅうろうずきんに紺甲斐絹こんがいきの帕ぱツチ尻しりは端は折しおり、紺足袋こんあしぶくろに雪駄穿せつたばき蠟色ろういろざや鞆たもとの茶柄ちやがらの大小おとしぎを落おとしぎ差さしにして
 チヤラリチヤラリとやつて参りました、此の武家にお筆おひしが頼たのみ入いる処、是が又一つの災難さいなんに相成あひなるのお話。

七

え、引続ひきつきまする依田政談よだまも、久しゆう大火たいかに就ついて筆記ひきを休やすんで居ゐりましたが、跡あとも切目きりめになりなりましたから一席いっせき弁べんじます事ことで、
 昨日きのう火事かじ見舞みまひながら講釈こうしゃく師しの放牛ほうぎゅう舎しゃ桃林とうりん子しの宅たくへ参まりまし
 た処ところ同子どうしの宅たくは焼やけ残のこりまして誠まことに僂しあわせ倖あだせと云いつて悦よろこんで居ゐり

ましたが、桃林とうちの家に町奉行の調べの本が有りまして、講釈師だけ丈

に能く調べが届いて居る、本が有るから貸して遣ろうと云うので、

わたくし私は借りて参りまして段々調べて読んで見ますと、依田豊前守

は、依田和泉守といい町奉行の時分は僅わずかな間でございます、えんき延

よ享元年の六月十一日御目附おめつけから致して町奉行役を仰付けられ宝

うれき曆三年の三月廿八日にはもう西にしまる丸の御槍奉行おやりぶぎように転じました

事でございます。して見ると調べの間は長い事ではございません、

其の次は曲淵甲斐守という是も名奉行で、宝曆三年四月の八日御

作事奉行さくじぶぎようより転じて依田豊前守と御交代になり明和めいわの六年八月

十五日までお勤めに成ったという。大岡越前守、依田豊前守、曲

淵甲斐守、ねぎしひぜんのかみ根岸肥前守などいはいずは何れも御名奉行と云われた方

で、申し続きましたお筆のお捌さばきは依田ほうしゅう豊州公から曲淵甲州公
 へ御引続おんひきつぎになりました一件で、錯ごみり雑ざつましてお聴き悪い事でご
 ざいましょう左様御承知を願います、扱さお筆は数寄屋河岸の柳番
 屋の蔭ひとよへ一夜置き位に出て袖乞を致しまするも唯養父を助けたい
 一心で、恥しいのも寒いのも打忘れて極ごく月げつヒュー／＼風の吹き
 まするのをいと厭いとわず深しんこう更こうになる迄往来中なかに佇たんで居て、人の袖
 に縫すがるといふは誠に氣の毒な事で、人も善い時には善い事許ばかり有
 りますが、間が悪くなると引続いて悪い事許り来るものでお筆な
 どは至つて親孝行にして為ひとなり人も善し屋敷育ちでは有り、行儀
 作法も心得て居おるから誰に会つても誉ほめられる様な誠に柔和な娘
 で有りますけれ共、板の間を働いたという濡衣を着て、親父に面

目ないと思う処から入水致しました処を、助けられたは仕合せで有つたが、その又己れを助けて呉れた米倉屋孫右衛門が零落を致して、京橋鍛冶町の裏家住い搗かてて加えて長ながの病氣というので、今は最もう何も彼かも売尽した処から袖乞いに出る様な始末、

筆「今日も夜更けて人も通らず、したが今夜百文でも二百文でも貰つて帰らなければ私の命を助けて呉れた大事なお父様とっさんに明日喰あてべさせるものを宛あてがう事も出来ず、と云つてお腹なかを空すかさせては濟まない、私は喰あてべなくても宜いいから何卒どうぞお父様丈にはお粥あじでも炊かいて上げなければ成らないから、もう詮しかた方がない、いやらしい事を云う人でも有つたら誠に道ならん事では有るが寧いっそ此の身を任しても親の為めには替かえられない」

と、覚悟を致し、ヒューという寒風かぜを凌しのいで柳番屋の蔭かげに立つて居ると、向うから前申ぜんし上げた黒縮緬くちまの頭巾かぶとを被り大小を落差らしに致して黒無地の羽織うゑ、紺足袋こしらという扮装こしらえで通りました、白しら張はりの小田原提灯ていとうが見えましたから、

筆「ア、お武家で有るか、万ひよつと一ひとつしたら少しはお恵みが有ろう」と思おもいツカつかくくくと来きたり、もう怖いも恥はかしいも打忘うれ武家の袂たもとに縫ぬい、

筆「お願いでございます」

武家「ア：はア、：：：誰たれも居らんかと思つたので大きびに恟びり致せしたが、何なんだえ、女子おなごかえ」

筆「はい：お父とつさんが長々なが煩わづらひまして其その日に追おわれ、何も彼か

も売尽しましてもう明日あしたは親どもにお米を買つて喰べさせる事が出来ません、それ故誠にお恥かしい事でございますが、毎日此これ処へ参りましては人様のお袖へ縫いさつて聊かの御合力ごごうりよくを受けまして親子の者が露命いのちを繋つないで居る者でございます、けれ共今晚斯かよう様に風が吹きますので薩張さつぱり人通りがございせんから、是迄立つて居ましたが少しのお恵みも受けませず、今晚此の儘歸りましては親を見殺しに致す様なものと存じまして誠に御無理ではございませぬが百文でも二百文でもお恵み下さいますれば親子の者が助かります、何卒どうぞ殿様お願いでございます」

武家「はい：はい、それはお気の毒な事じゃ、むー：」

小田原提灯をこう持上げて見ますと、下を向いて袖を顔に押

当て、ポロ／＼泣いて居ります。昵じつとその様子を見て居りましたが、臆やがて一掴みの金子を小菊に包んで、

武「これを遣わすから、早う帰つて親御に孝行を致せ、したが
おなご
女子の身の夜中やちゆうと云い、いかなる災難に遇わんとも限らんから
きようこう
向後袖乞は止めやに致すがよい」

とお筆に渡すと其の儘往つて仕舞いました。お筆は嬉し涙にく
れて見送つて居りましたが家うちへ帰つて包を明けて見ますと古金こきんで
四五十両、お筆は恟びつくりして四辺あたりを見廻し、

筆「はア：何どうしたんだらう、心の迷いじやアないか知ら、先さ
つまあすこ
刻彼所を通り掛つたのは武さむらい士と思つたのが狐か何かで私わかを化し
たのじやアないか知らん、私がお鳥目を欲しいと思う其の氣を知

つてつままれたのか知らん」

と足をギイーツと抓つかつたが痛いから、

筆「夢じゃアないが、ハテ何うしたんだろう、向後袖乞に出る
 など仰しやつたから、御親切な殿様で私の戸外おもてへ出ない様に多分
 にお金を下すつた事か、あゝー……私の為には神さま……」

と手を合せて伏拝み何所どこの人だか知りませんから心うちの中で頻しきり
 と札を云い、翌日あしたに成りますると先まず此金これでお米を買うんだと云
 う、其のお米を買うたつて一時いちじに沢山たん買つて知れては悪いと思
 いましたから、狐鼠こっそり少し買い、一朱もお金を出せば薪も買えれば
 炭も買える、又金を一つ処へ仕舞つて置いて知れると悪いと思
 いましたから、彼方あつちこつち此方こつちへお金を片附けて仕舞つて置きました、些ちつ

とずつ出して使ひ、

筆「お父さまはお寒かろうから暖かい夜具を着せたい」

と夜見店へ参りまして古着屋から小僧さんに麻風呂敷に搔卷
よみせに三布蒲団を背負い込ませ、長家の者に知れない様にお父さんに
みのぶとん半纏を着せたいと云うので段々と狐鼠く買物をして参りますが、
せお世間じゃア直に目が着きます、或る時例の姐子が、
すぐ

姐「おい勘次や」

勘「えゝ」

姐「奥のお筆さんは良い旦那でも附いたのじゃアねえか」

勘「然うでげすね、此の頃は大変様子が宜いから、ね、お父さ
 んなどは何うも少し顔色が違えやして、此の頃じゃアにこゝし

て居やす、私わっちにも此の間手拭を呉れたね」

姐「手拭を貰つたと、何なんで貰つたんだい」

勘「何んだって度々水を汲んでやったり何なんかするんで大きに色々

お世話に成るって呉れましたが余あんなり好いい心持だから匂いを嗅いだ

だが、些ちつとも好いい香にお気はしませんね、矢やっぱり張手拭の臭いがした」

姐「あの娘こなんぞに何か貰いなさんなよ、何なんでも旦那が附いた

に違ちがえねえノ」

勘「え、何なんだか知りませんが、其の旦那てえのが些ちつとも来

るのを見た事がねえ、何なんでも夜中よなかに来るんでげしようよ何どこ処かへ

参おまいり詣ゆに行くつて時々出えくしたか、何処どこか知れない処で逢つ

てお金を貰つて来るんでげしよう、あの親父が此の間髭ひげを剃りま

したよ白髪交りの胡麻塩頭を結ゆつて新しい半纏を引掛ひっかけて坐まつて居ま
 すが大きに様子が快よくなつて病人らしく無く成つたが、娘ねえさんも
 襦袢に新しい襟を掛けたぜ、好いいもんじやア有りやせんが銘仙か
 何なんかの着物が出来ておつな帯を締しめましたよ、宜いい装なりをすると結むすび
 髪がみで働いて居る時よりやア又好よく見えるね、内ない々魚などを買
 つて喰う様子でげすぜ、此の間も魚屋が来たら何が有る、鱈……
 それじやア鱈をお呉くれつて鱈を買いやしたが病人に鱈は宜いうござ
 えますのかね」

姐「そんな事を気にしなくつても宜いいが何うも様子が訝おかしい」
 勘「私わっちも娘ねえさんの顔が見てえから時々行ゆくんです」

此の勘次が毎日の様に来ては手伝いますから氣の毒だと思つて

孫「なに然うでも有りませんのさ」

勘「此んな好い子を持ったのは貴方の御運が宜いのでさア」

孫「なに運が善い事も有りアしません、今じやア腰が脱けて仕舞つて何の役にも立たなく成つてますから、併し毎度有難うございます、娘一人で何事も手廻りません処を貴方が水を汲んで下さったり、其の上御親切に姐さんが又度々気を注げて下物を下さり、誠に有難う存じますお蔭で親子の者が助かります、貴方姐さんに宜しく仰しやつて下さいまし」

勘「じやア姉さん汲んで上げよう」

と井戸端へ行つて水を手桶に三杯も汲んで遣りました。

筆「ちよいとく勘次さん少し待つて下さい」

勘「え何なんです」

筆「少し上げたいものがありますから、手拭の貰ったのがあるんです」

勘「又手拭をかえ……此の間も貰ったのに……」

筆「いえ詰らんですすが持つて行つて下さいよ」

是から千代紙で張はって有おかる可笑な箱の蓋を取つて、中から手拭を出そうとする時、巾着の紐が指に引懸つて横になるとパラ／＼と中から金子かねが散ちら乱ばつたから慌てゝお筆が之を隠し手拭ひとつを一朱銀ひとつを一個出して、

筆「誠に少し許ばかりでございますけれども、毎度御厄介に成りま
すから」

勘「何う致しまして、是は何うも、えへへ、何うもお氣の毒で、誠に有難う」

と礼を云いながら心の中で大層金子かねを持って居やアがると斯こう思いました。口々に分けては有りますが下へ落ちたが二十両許りぞラくくくと云うのを慾張た眼で見ると五六十両も有ろうと思いましたが「此こ奴いつア成程姐さんの云う通り何なんでも彼あいつ奴は良い旦那どりをしてこつそり金を呉れる奴が有るに違ちがえねえ、彼あんな様なけちな千代紙で貼つた糸屑を入れて置く箱ん中の巾着からザクリと金が出るんだからね」と此の勘次と云う奴は流ながれ山やま無む宿しゆくの悪わる漢いやつでございますから、心の中で親父は病氣疲れで能く眠るだろうし、娘も看病疲れで寝るだろうし、能く寝付いた処へ忍込んであの金か

子ねさえ取れば、又西河岸の桔梗屋きぎようやへ行つて繁岡しげおかの顔でも見て
 楽しむ事が出来るという謀叛むほんが起り、其の夜深更よに及んでお筆の
 家うちの水口を開け忍込んで見ると親子とも能く寝付いて居る様子、
 勘次もとは素より勝手を知つて居りますから、例の千代紙で貼つた針
 箱同様の糸屑の這入つて居る箱の中から巾着を盗み出し、戸外そとへ
 出ると直すぐに駕籠に乗つて飛ばして廓内なかへ這入り西河岸の桔梗屋と
 いう遊女屋へあがりました。

勘「久しく様子が悪かつたので来なかつた」

馴染の娼妓か、

△「おやい鼬たちの道や」

勘「なに―篋棒めえ、鼬の道だつて、あのなア繁岡さんと喜瀬きせ

川^がさんを呼んで呉んな、揚女郎^わてえ訳ではねえが、私^わは少し義理
 が有るから、旨^{うめ}え物を沢山^{たんとあが}食れ、なにー、愚^お図^おく^で云うな、大^{おお}
 台^えを……大台をよ、内^{うちげいしや}芸^う者を二人^{ふに}揚^あげて呉^あんな」

と金の遣い振りが暴^あい。

亭主「勘次^あさんは大層^あ金の遣い振りが暴^あいじやアねえかのう、

喜助^あ」

喜「へえ、何^{なん}だか博^{ぼくち}奕^いに勝^かつたと被^お仰^ついます」

と聞いて内証^{うちしやう}では何^どうも様子^{ようす}が訝^おかしい、知^しつてる人^{ひと}だから朝^あ勘^か
 定^{さだ}でも宜^いいんだが、金の遣^や振^りりが訝^おしいから宵^よ勘^か定^{さだ}に下^{くだ}げて貰^{もら}え。
 と下^さつた金^{かね}を見^みますると三^{みつ}星^{ぼし}の刻^き印^{いん}が打^うつて有^ある、是^こは予^{かね}て巡^じ
 達^{ゆんたつ}に成^なつて居^おる処^{ところ}の不正^{ふせい}金^{かね}でござ^ごいますから、

亭主「是は打棄ちやア置れない、直ぐに……」

と云うので、是から其の頃の御用聞を呼びまして此の事を話すと石子伴作様いしこばんざくと云う定巡りの旦那が、

伴「夫は手附それかずに出すが宜い」

と云うので、二日流連いっづけをさせて緩ゆっくり遊興をさせ、充分金を遣わせて御用聞と話合ひの上で、ズツと出る処そとを大門外で、

○「御用」

勘「ハツ……」

と云つて恟びつくりする、大抵な者は御用聞が御用と云う声を掛けるとペタペタとなるといひます。直すぐに縛られて田町の番屋へ引かれる、仕様の無いものでございます。

○「勘次てめえの身分にしちやア金遣いが滅法あらに暴えが、桔梗屋で
使用つかた金はありやア何処どこから持って来た金だ」

勘「むゝ、彼あれア、…バ…」

伴「何を愚図なく言つて居やアがるんだえ」

勘「へい、何なんで、賭博ばくちに勝ちましたので」

伴「なにー、博賭ばくちに勝つたと、馬鹿ア云え、汝てめえの様なケチな一

文賭博をする奴が古金こきんで授受とりやりをするかえ、有体ありていに申上げろ」

勘「マ、全く博賭に勝つたに違ちがえござえません」

伴「何処どこの博賭場で勝つたんだ」

勘「ムゝ、カ、カ、神田まきの牧様の部屋なで何んなしまして、小川おがわま

町ちの土屋つちやの…」

伴「黙れ、尋常に申し上げろい、幾ら隠したって役にア立たねえから、何処で盗んだか云えよ」

勘「いえ全く其の力、力、勝ったんで」

伴「これ勘次、てめえ汝其様な事を愚図く云ったって役にやア立たねえ早く云つちめえ」

勘「いえ……その……全く勝ったんで」

伴「云わねえな、何うしても此こいつ奴ア云わねえから打てく」

○「お慈悲深い旦那だから本当の事を喋って其の上でお慈悲を願え、お前めえだつて万まんざら更素人しろうとじゃアなし、好いい道楽者じゃアねえか」

伴「ええや、しめろく」

とピシーリ／＼叩かれるから直すぐに口が開あいて、実は五斗兵衛市の処いそろうに食いそろう客うちに居る中に裏うちに小間物屋孫兵衛と云う者が居て、孫兵衛の娘のお筆が私に礼をすると云つて巾着をすべらし、金の出たのを見て不凶した出来心から全く盗んだに相違ごございません。と白状を致しましたから直に京橋鍛冶町の小間物屋孫兵衛方へ踏ふ込み込み娘お筆が縄に掛つて引かれたは何なんとも云えぬ災難でございませす。何どう云う事やら訳が分らず腰の抜けて居る孫兵衛は大屋さん何どう云うもんで。と泣いて許ばかり居りますから長屋の者が来ては色々なだに賺なだめまされども中々愚痴なだが止みません。五斗兵衛市の姐御は気の毒でなりませんから、

○「私の処やくざへ無頼いそろうな食いそろう客うちを置いたばかりで斯こう云う事に成

つたんだが、決してお筆さんに其様な理由はない不正金だという
が」

孫「イエ金子などが宅に有る氣遣いは有りません、何う云う災
難ですか、大屋さんお筆を返して下さいませんかと私は小便に行く
事もお飯を喰う事も出来ません、お願いでございませすから」
とワイ／＼泣いて居つたのは然もあるべき事でございませす。

八

扱お筆を段々調べて見ますと、親父が大病で商売も出来ず、衣
類道具も売尽して仕様の無い所から、毎晩柳番屋の蔭へ袖乞に

出て居りますると、これ／＼斯う云うお武士が可哀想だと仰し
 やつて紙に包んで下さいましたのを、お鳥目かと存じて宅へ帰り
 開けて見ると金子でございました、親に御飯を喰べさせる事も出
 来ん様な難渋な中ゆえ、遂大屋さんに黙って使いました段は誠に
 恐入りますという所が、口不調法ではございますが、曲淵甲斐守
 様が一目見れば孝心な者で有るか無いかはお分りにも成りましよ
 う、殊に勘次の申立と符合致して居りますから遠の名奉行に
 も少し分り兼ました。

甲「全く其の侍に貰つたに相違有るまいが、是は芝赤羽根の勝
 手ヶ原の中根兵藏という家持町人の所へ忍入り家尻を切つ
 て盗取つた八百両の内の古金で、皆此の通り三星の刻印の有る

古金で有るに依て、其方が唯貰つたでは言訳が立たぬ、全く親の
 為めに其方は其の日に困るに依て一時凌ぎに使い、翌日町役
 人とも相談の上訴え出ようと思う折柄、勘次に盗取られたに相
 違有るまいな」

と云うお慈悲のお言葉。

筆「へえ恐入りました、夫に相違ございません」

甲「うむ、吟味中入牢申し付ける」

とピツタリ入牢と相成りました。さア何うも近所では大騒ぎ、
 寄ると集ると此のお筆の評判ばかりでございませぬ、或る人は頻り
 に不承知を唱えまして何しろお上はお慈悲だつてえが大違いだ、
 彼様な親孝行な娘を引張つてつて牢へ入れちまつて、金を呉れた

奴が盗人^{ぬすびと}だか、武家だてえが何うしたんだか訳が分らねえ、物を人に呉れるなら名でも明して呉れるが宜いんだ、何うしてお筆さんが泥坊などをする様な娘^こでない事は誰でも知ってる、夫^{それ}に此様な事になるといふのは私^{わし}には些^{ちつ}とも訳が分らねえ、お上は盲目^{めくら}だ。という又一人が、

△「其^{そん}様な事を云うなよく」

と近所では色々噂^{うわさ}をして居る。吉原帰りは田町の蛤^{はまぐり}へ行つてい盃^{つばい}やろうと皆其の家^{うち}へ参ります。

×「もう是で飯を喰おう」

△「もう一本やろう」

×「余^{あんまおそく}り遅なるから、丁場^{ちようば}の仕事がよ」

△「丁場へは兼かねが先に行つてるからもう一本やろう」

×「兄あにいは酔よつちまつてる、グツと思切つて続けてやんなもう充分酔つてるから飯を喰おうじゃアねえか」

△「宜いいからもう一本交際つきあいねえな、汝てめえが二猪口ふたちよこばかりアイ

をすれば、残余あともいは皆己みんなが飲んで仕舞わア：長い浮世に短い命だ：

人は：篋かぶ棒ぼうめえ正直にしたつてしなくたつて同じ事だ京橋鍛冶町の小間物屋のお筆さんの事を見ても知れたもんだ」

×「兄あにい彼かれを云いなさんなよ、余あんなりパツパと云つて捕つかまつて困つた者が有るから」

△「困つたつて癪さわに障さわらア、余あんなり理由わけが分らねえじゃアねえか、親父が病気で困つてるから毎晩数寄屋河岸の柳番屋の蔭へ袖乞そでごに

出て居る処へ通り掛つた武家さむらいが金を呉れたんだてえが、其の位の親切が有るならよ、己は何処どこの何う云う武家ぶけで若し咎められた時にやア己が遣つたと云えつて名前でも明あかして置おけば宜いいのに、無闇に金を呉れやアがつたつて、情なさけにも何もなりアしねえ、あの何と云つたつけ巴ともえの紋じやアねえ、三星とか何とか云う印いんが押して有る古金かねを八百両何家どこかで家尻を切つて盗んだ泥坊が廻り廻つて来てそれでまア、彼あの親孝行な……」

×「おい／＼悪いよ、其様そんな事を云つて京橋あたり辺でも係かり合あいに成つたものが有るから止しなよ」

△「だつてよ、お上では親孝行の者に御褒美を呉れて、親に不孝をする奴は磔はりつけ刑けいに上げてえじやアねえか、其の親孝行の者

を牢ん中へ押込んで、腰の抜けた親父一人残して置くてえ家主の根性が分らねえ、お救米でも願つて遣るが宜いんだ、此間も甚公の野郎が涙を溢し乍ら、あの娘は泥坊なぞをする様な者じゃアねえ彼様な娘はねえつて然う云つてた」

×「おー其んなことを云いなさんなよ、係合になると宜いぜ」

と制しても中々聞きません。すると他の一人が、

△「係合いになるつて余り癩に障らア今度奉行が替つたか、一体奉行が理由が分らねえ」

×「おい止せてえのに」

△「云つたつて宜い、なツてえ、糞放め、罪もねえ者を無

闇に牢の中へ放り込んで、金を呉れた盗人がふん捕まるまで、牢の中へ入れときやアがつて面白くもねえ、本当に癩に障つて堪らねえや、些つと風が吹くと路次は六ツ限に木戸を締つちまうんで湯が早く抜けちまつても困らア職人は、彼の娘の親父は腰が抜けてるてえから己ア可哀想でならねえ」

とシク／＼泣出しました、

×「泣上戸なきじょうごだな、泣きなさんなよ、涙を零して見つともねえ鬼の眼に涙だ」

△「鬼でも蛇でも構ア事アねえ、余り口惜しいから云うんだ」

×「おい、止せてえ事よ」

話をして居ますると衝立の陰からずいと出た武家は黒無地の

羽織、四分一拵しぶいちごしらえの大小、胸高むなだかに帯を締めて品格ひんの好いい男、
 年頃は廿七八でもありましよう、色白で眉毛の濃い口許くちもとに愛敬
 の有る人物が、

武家「是は何うも大分だいぶ機嫌だのうだのう」

△「えへへ、是は殿様……御免なさい、隣席となりにお在いでとも存
 じやせん」

武「いや衝立さつきの陰で先刻さつきから一盃やうて居た、職人のお前達の
 話は又別段で」

△「えへへ、旨く云つてらつしやるね」

×「殿様御免なすつてから大きな声をして、此奴こいつア少し喰くらい酔
 ってるもんですから詰らん事を云つて、何卒どうぞお構あちらいなく彼方へお

出でなすつて」

武家「あはゝゝ馳走になろう、合あをしよう、もう一銚子附けさせろ、身共も一盃馳走に成ろう」

△「えへゝゝ旨く云つてらア、殿様は如才じよさいねえや、巧うめえや」

武「酌を仕様」

×「いえ殿様、此方こつちでします」

武「いや酌をしよう」

△「えへゝゝ是は有難うございます、何れお浮いれでございませう、昨夜ゆうべ廓内なかへ行つて」

武「うむ、廓内へ行つて来た」

△「えへゝゝ殿様なんざア男が好よくつて美いい扮装なりだからもてや

すが、私どもはもてた事はなく振られてばかり居ても行き度えから別段で」

武 「何うだ猪口を貰おう」

△ 「御免なせえまし、水を貰いましょう、おい女中茶漬茶碗へ水をよう、なツてえ、宜いから黙つて居ろい」

武 「水などで灌いで水臭い、其んな事をせんでも宜しい」

× 「兄い止しなよ」

△ 「宜いよ黙つて居ろえ」

武 「是は何うも、酒の嗜きな者は妙なものだ、が今聞いて居たが、何か其の京橋辺の数寄屋河岸の柳番屋の陰で金子を貰った娘が有るとか云う話だが、それは何う云う訳だ」

と云われた時は両人は驚きわな／＼しながら。

△「へえ」

×「だから止しねえと云ったんだ大きな声をしてパツパと云うから宜いけないんだ」

武「何も心配な事はない何かえ夫それは」

△「へえ………誠まことにどうも、喰くえ酔よつて居ゐまして大きに不調法を致いたしました、真ま平へい御免ごめんなさいまし」

武「いや不調法な事は些ちともない、柳番屋の処へ袖乞てうぎいに出る娘むすめに武家ぶけが金子かねを遣やつたんだな」

△「へえ、何なにうも明瞭めいりょうり分わりませませんので」

武「いや分わらん事ことはない、今お前いまが話わをしたではないか、何なんと

云う者の娘だえ夫それア」

×「殿様此これ者は喰くらい酔よつて居まして唯詰よらねえことを云つてたんで出鱈たらまえで、唯茫ぼんやり然、変な話なんで、嘘を云つたんで」

武「なに嘘のことはない、何も心配になる事はないから、私わしに聞かすれば宜いのだ、京橋の何処どこの者だえ……」

△「へえ」

武「云わんか、いま貴様が云つた事は衝立の蔭で聞いて居つたが、少し調べる事が有るから聞くのだ」

×「だから己が先刻さつきから、斯こう云うことを云つて係合けいあに成つたものが有るから大きな声をして云うなど云うのだ」

△「本当に殿様ア……私わっちア明瞭めいりょうり知らないんで」

武「知らんたつて只今云つたじやアないか、何とか娘の名前まで云つたぞ」

×「へえ……」

武「云わんか、云わんと云えば免ゆるさんよ、隠立てを致せば捨置かれんから兩人共近所に自身番が有ろうから夫れへ連れて行く」

×「真平御免なさい」

△「何うぞ真平御免を」

武「謝罪あやまらんでも宜い、貴様達の罪じやアない、云いさえすればよろしいのだ」

×「へえ、京橋……鍛冶町」

武「うむ、京橋鍛冶町、少し待つて呉れ」

と腰から矢立を出し懷中から小菊を出して、

武「京橋鍛冶町で、何と云う者の娘だえ」

「孫右衛門娘で筆でございます」

武「孫右衛門の娘の筆か、此の月の幾日の晩だ、うむ、成程六

日の晩数寄屋河岸の柳番屋の蔭に於いて金子を貰ったのか、其の

金子は幾ら有った」

△「何だか其処の処は明瞭り分りません」

武「夫を何者が盗んだと云ったな」

△「へえ、それは五斗兵衛市の家の居候で勘次てえ奴が」

武「五斗兵衛市てえのは名か、可笑しいな、其の家の食客に居

るものだな」

△「いえ、なに居候で」

武「だからよ、勘次と云う者が盗み取つてそれが露見をして目下其の娘は牢に居るんだな」

△「へえ牢に這入つちまいました」

武「それは可哀想な事で、町役人は何と云う」

△「町役人と云うと何うど云う事で」

武「いえさ家いえぬし主だよ」

×「家主と云うのは何んで」

武「其の長屋の差配を致す者よ」

△「大屋でげす」

武「大屋てえ事はないが、まア大屋でも宜よいその大屋は」

△「へえ、と藤兵衛」

武「藤兵衛か、宜しい、貴様の名を一寸書いて置こう、貴様は何と云う名だ」

△「へえ御免なすつて」

武「謝罪あやまらんでも宜い」

×「え、殿様、此者これは全く喰くらい酔うつて迂濶うっかり云つたんで」

武「喰い酔うも何もない名前を云え、云わんか」

△「へえ大変だな、熊ツ子てえます」

武「熊ツ子と云う名前はない、熊吉か熊五郎か何うだ」

×「へえ慥たしか熊五郎」

武「慥か熊五郎と云う奴があるか、貴様は何んと云う名だ」

× 「私わっちも……私わっちは何も云やアしません」

武 「何も云わなくとも連れだから云えよ」

× 「何うぞ御免なすつて」

武 「ゆるせと申したつて連れだから貴様の名も書かなければな

らんよ」

× 「へえ……私わっちア、ガチャ留とめと申します」

武 「ガチャ留と云う名が有るか」

留 「何なんだか知りませんが子供の時分から、ガチャ留とめツてえます」

武 「留吉か留次郎か」

留 「其そこ処この処こは私わっちどもの事ですからガチャ留でお負けなすつて」

武 「負けると云う事はない、留吉か全く」

留「えへ、忘れました」

武「自分の名をわすれる奴があるか貴様達は最^もう宜しい」

兩人「有難う存じます」

と兩人は直^{すぐ}に駈出して小田原迄逃げたと云うが、其^{そんな}様に逃げなくつても宜しい。此の武家^{ぶけ}は莞爾^{にっこり}笑つて直其の足で京橋鍛冶町へ参りました。又、親父の孫兵衛は只おろくく泣いてばかり居ます、家主も誠に気の毒で間^まが有れば時々見舞いに來ます。

家「はい御免よ孫兵衛さんお前^そ然う泣いてばかり居ちやアいけないよ、其^{そんな}様にくよくくしたつて仕方がない、是はお前何うもその、悪い事は悪いこと、善^{よし}悪^{あし}共にお上^{かみ}は明らかにお調べなさる処だから、全体お前大金を貰つた時にねえ、ちよいと私にでも話

をすれば直すぐに訴えて仕舞えば何も仔細ないのだ、彼の娘あは他人の物を取る様な娘じゃアないが、私の長家から縄付きに成つて引かれる者が有つては家主の恥辱はじだが、なに彼の娘はお前を大切にしてお孝行な子だから、何どんなそれおんみつがたア穩密方が来て調べたつて長い間のお前の煩わづらいを介抱した様子から皆世間みんなで知つて居るから早晩まに彼の子も罪ゆが免りて帰れようから然う泣いてばかり居ちやアいけない、身体に障ると悪いから余あんまり心配をせぬがいゝ」

九

親父は涙をこぼしまして、

孫「はい、有難う、私は此様な業病に成りましたもんだから、彼あれが私を介抱するので内職も出来ませんゆえ追々其の日に追われ、何も彼も売尽して仕方がない処から、彼が私に内証で袖乞に出る様な事に成ったので、斯こう云う災難に出会ったかと思いますと、私わたしが彼を牢へ遣った様なものでございます、然そうして此の寒いのに牢の中へ這入りましては貴方彼は助かる氣遣いはございません、纖細かぼそい身体ですから、其の上今迄引続いて苦労ばかりして居りますので、身体が大概傷いたんで居ります処へ又牢へ這入り寒い思いをして、彼に万もしも一の事でも有りますと、私は此の通り腰が抜けて居る、他に身寄頼たよりはなし死ぬより他に仕方がございません、お家主さん貴方何卒筆どうぞがお免ゆるしに成つて帰れる様にお願いなすつ

て下さいまし」

家「願うと云う訳にやアいけない、素もとより家尻を切つて取つた八百両の内の金子かねだと云うから、何いずれ其金それを呉れた奴が有るんだろうが、其奴そいつが出さえすれば宜いいんだが、お調べが容易に届けば宜よいが、調べが届きさえすれば彼の娘あは帰るんだからね、是も災難だ」

孫「災難だつて此こ様な災難が有る訳のものじゃア有りません」
家「お前が困るなら宅うちの奴も来るし、又長家の者も世話をして呉れるから然そう泣いてばかり居ちやア身体が堪らねえ」

孫「えゝ、神も仏もないんで、此様な災難かに罹かるてえのは、あゝ私は死にたい」

家「其様な氣の弱い事を言つてはいけない、いか程死度いから
つて死なれる訳のものではない」

と頻りに宥めて居る処へ、門口から立派な扮装をして、色白な
眉毛の濃い、品格と云い容子と云い先ずお旗下なら千石以上取
りの若隠居とか、次三男とか云う扮装の武家がずっと這入つて参
り、

武「御免小間物屋孫兵衛さんのお宅は当家かえ」

家「はい、是は入らっしゃいまし、是は入らっしゃいまし」

武家「はい、御免を」

家「其処は濡れて居りましたして誠に汚のうございませうが、サ、何
うぞ此方へ入らっしゃいまして……奥の喜兵衛さんが願つて呉れ

たのだから：誠に有難う存じまして、斯ういう貧乏人の処へお出でを願ひまして恐入りますが、能く来て下さいました、貴方は奥の喜兵衛さんから願ひました、番町のお医者様で」

武「なに私は医者じゃアないが、貴方は何かえ、此の長屋を支配なさる藤兵衛殿と仰しやる仁かえ」

藤「へエく、へエ」

武「今御尊家へ出たよ」

藤「私の宅へ入つしやいました、左様ですか、え、此者がその孫兵衛と申す者」

武「はい始めまして、え、承れば当家中もとんだ災難で、何かその数寄屋河岸の柳番屋の蔭へ袖乞いに出た娘に、通り掛つた侍

が金子かねを呉れて、それが不正金で親子の者が、凶らざる災難を受けたというは氣の毒な事で、お前は嘸まてかし御心配な事で」

藤「へえ誠に心配致して居りますので、何うか分りますれば宜いと思つて居ります」

武「いやそれは心配には及ばん、明日私あしたわしが其のお筆さんと云う娘こを町奉行所へ訴え出て帰れるようにして遣る、其の金は己わしが遣つたんだ」

藤「へえー、左様で、それなれば何も仔細無い事で、何かお上でもお疑いがございまして、不正金とか何とか云う事を申すので困りましたが、誠にどうも殿様が下さいましたのなら何も仔細は有りません、孫兵衛さんお前さんちよつと一寸御挨拶を」

武「はいお父さんか始てお目に懸つたが実は日外私が数寄屋河岸を通り掛るとお前の娘子が私も親の病中其の日に困り親共には内々で斯様な処へ出て袖乞をすると言つて涙を溢して袖に縫られ、誠に孝行な事と感服して聊か恵みをしたのが却つて害に成つて、不図災難を被せて気の毒で有つたが、明日私が訴えて娘子は屹度帰れる様にして上げるが、名前も明さずに金子を遣つた処は誠に濟まんが、明日は早々にお筆さんの帰れる様にして上げるから、金子を遣つて苦勞をかけた段は免して下さい」

藤「何う致しまして、有難い事で、お礼を云いなよ、殿様が下さつたんだから心配はない」

孫「はい、誠に有難う、心の中で私は一生懸命に観音を信心致

しました、どうも昨夜貴方少しうとく致しまして夢を見て、観
 音様が私の枕辺まくらべに立って、助けて遣るぞ助けて遣るぞと仰しや
 いました、目が覚めますと矢張り宅うちに寝て居ったので、不断其の
 事ばかり思つて居るから観音様の夢を見たのだ、あゝ観音様も分
 らねえと神や仏を恨む様な愚痴を云つて居ましたが殿様が出て己おれ
 が遣つたと云つて下さいますればお上に於いてもお疑いは無い事
 で、お筆は免されて帰れますが、少しも早く、成ろう事なら今晚
 帰る様に」

武「今日は些ちつと遅いから明日あした屹度帰す、是は誠に心ばかりだが
 ……娘は明日屹度取戻してお前の家うちへ帰るようにして上げるが、
 此これ金ほんは真の心ばかりだ、是は決して不正金なんでも何でもない仔細の

無い金子かねだから、どうか心置きなく使つて下さい、私わしが遣つたに
違ちがいない」

藤 「誠に恐入ります、是は何うも娘を帰して下さるのみならず
多分の金子かねを……」

武 「いや沢山たんとはないたつた十金だから、何ぞ暖なんあつたかい物でも買つて
おあがり」

藤 「是は恐入ります、おい孫兵衛さん旦那様が十両下すつたよ」
孫 「十両よりはお筆を早く帰して下さい」

藤 「そんな事を云うものじゃアない親父は少し取逆とりのほせ上て居ま
すので」

武 「えゝお家主一寸自身番まで一緒に行つて貰もらいたい」

藤 「へえ、自身番は直其処すぐそこで」

武 「少し御相談が有るから、じゃアお父とつさん私わしは帰る、明日あした屹度お筆さんを帰すよ心配しちやアいかん、心を確しつかり持つておいで、大丈夫だから」

藤 「はい有難う存じます、又また多分のどうもお恵みで有り難う存じます」

武 「さ、行きましょう」

藤 「へえ、じゃア宜いいかえ孫兵衛さん、今宅たくの何をよこすから、旦那と一緒に自身番まで往つて来るから、此方こちらへ入いらつしやいまし、板ががた付いて居なます、修なおそうと存じて居なますが、遂つい大金が掛りますので、何卒どうぞ此方へ」

武「はいく」

是から路地を出て町内の角の自身番まで参り、

藤「誠に爺嗅い処で、何うか此方へ」

武「いやもう構つてお呉れでない心配をせんが宜ろしい、え明
 日私しわしが奉行所へ出て私が金子かねを遣つたに相違ない事を訴えれば、
 仔細はない、が長屋に事の有る時は支配を致して居いる処のお家主
 の御迷惑はお察し申して居る」

藤「へえ実は私わたくしも心配致して居ましたが、殿様が遣つたと仰し
 やつて下さいますれば何も仔細ない事で」

武「明日は少し早く四ツ時分から腰掛へ出て居て貰たい度い」

藤「へえく四ツ時分からへえ成程」

武「え、此の近辺でなんですかえ、金満家は何処どこですな」

藤「え、金満家と申しますと」

武「いえさ、町内で金満家の聞えの有る家うちは」

藤「左様でございますなどうも太刀伊勢屋たちいせやなどは大層お金持だ
 そうで」

武「他には」

藤「質屋で伊勢銀いせぎんと云うが有ります」

武「じゃア伊勢銀の方に仕様」

藤「是からお出でに成りますなら御一緒に参りませうか」

武「いや一緒に行かんでも宜しい、エ、明日お筆さんをお前が
 引取に来なければならんから、組合を連れて印いんぎよう形持参でお出いで

を願たい度いい」

藤「宜しゅうございます、承知致しました」

武「あれは天正金てんしやうきんで有るか無いかは明日出れば分ります、大きに御厄介で有った」

藤「まあお茶を」

武「いえ宜しい、左様なら」

すうつと帰つて仕舞いましたから何なんだか家主にも薩張さつぱり分りません。家主の藤兵衛はあれ程の殿様だから嘘も吐つくまい、併しかしよもやあの人が盗賊では有るまい、それにしても何どう云う事である金が彼のあ人の手に這入ったか、と考かえて見たが少しも分りません、まさか彼奴あいつが盗賊なら私わたくしが泥坊でござると云つて奉行所へ出る氣

遣いは無いが何うしよう。と町代の與兵衛ちようだいよへえという者と相談の上で四ツ時に町奉行の茶屋に詰めて居ります。四ツ半に成つても来ません。

與 「藤兵衛さん」

藤 「えゝ」

與 「何なんだかお前の云う事は当あてにならねえ、未まだ来やアしねえ、何なんだか変へだぜ」

藤 「だつて誠に品格ひんの好よい、色白な眉毛の濃こい、目のさえ／＼した笑うと愛敬あいけいの有る好よい男おとこの身丈せいのスラリとした」

與 「男振おとこぢりや何かは何うでも宜よいが是こゝは来こないぜ」

藤 「然そうですな、おやお隣町内の伊勢銀いせぎんさん何うです」

芳「なに盗賊が這入りまして金を二百両盗まれましたから訴えるんで、宅は大騒ぎです」

藤「昨夜盗賊が、へえー、何処から這入りました、家尻を切つたつて、へーえ何うもそれはとんだ事でしたな、お代に芳造さんですか、それはまア不図御災難で」

芳「へえ、酷い目に遭いました」

藤「少しも知りませんでした」

芳「土蔵や何かは余程気を注げますんですが」

藤「へえー」

と話をして居ります処へ件の武家が雪駄でチャラリ〜腰掛へ這入つて来ました。

藤 「おや是は入らつしやいましそれ見なせえ嘘う吐くものか入らした、さどうぞ此方へ」
こちら

武 「昨日は色々お世話に……今日こんにちは早くから出ようと思つたが少々余儀ない事で友達に逢つて暇いとまご乞いなどをして居たんで少々時刻が遅れてお待たせ申して済みません」

武 「え、此のお方は」

藤 「え、組合の名主代で」

武 「大きに御苦労」

與 「えへ、町内の小間物屋の娘をお助け下さり有難う存じます」

武 「はい御奉行のお退出さがりまでは未だ余程間あいだが有ります」

藤「え、殿様一体あの一件は何う云う事なんで、へ、へ、附かん事を伺います様だが、何ういう理由わけかあの金子きんすをお上では不正金だつて、三星の刻印が打つて有るなどと申しますが」

武「うむ、彼金あれは芝赤羽根の中根兵藏方の家尻を切つて盗んだのが丁度十二月十二日の晩でね、八百両取つたんだ」

藤「へえ、其の盜賊が知れませんか」

武「いや其金それを取つた賊は拙者だ」

藤「えへ、御冗談を、えへ、へ」

武「いや全くだ、何うも、悪い事を誰も知らん者は無い、賊を働くは悪い事で天道に背くとは思ひながら、知りつゝ此の賊になるもねお家主、是は皆前ぜんせい生の約束事かと思う、悪いから止めや

うとしても止められんね、これは妙なもので、十四の時から私は盗賊を為します」

藤「えへへ、御冗談ばかり」

武「いや冗談じゃアない、実は中国の浪士で両親共逝なく去なくなつて伯母の手許に厄介に成つて居おつたが十四歳から賊心を発おこして家出をなし長い間賊を働いて居つたが是まで知れずに居つたのだがね」

藤「へえー全く殿様が」

武「あい、何うも止めようと思つても止められんものだね、私わが取つた金を遣つたんだと斯こう云つて出れば、お筆さんの助からん事は有るまい、私も長らく他人ひとの物を盗み取つて旨い物を喰いひよい着物も着たが、金子かねを沢山取つた割合には夫それほど程えよう栄耀はせん

よ、皆みんなな困る者に恵んだ方が多い、可哀想だと思つては恵みおのれ、己の罪を重ねる道理だから止そうとは思ひく止められんと云う処が是が因果じゃな、前世の約束事で有ろう、もう天命を知りこゝらが丁度宜い死に処だ、私は廿九に成りますよ」

藤「へえー、えへゝゝ、へえー」

武「名乗つて出てお上の御処刑を受けた跡でお題目の一遍も称あげてお呉れ」

藤「へえ、途方もない御冗談ばかり」

武「いや冗談じゃア無い全くだ、其方そちらのお方は」

藤「是は伊勢銀と申す町内の質屋の手代ですが、昨晚盜賊が家尻を切りましたので今こんにち日お訴えに参つて居りますので」

という^{さむらい}と武士は平気で、

武「左様か直すぐに分りますよ、昨夜お前さんの処の家尻を切つたのは私わしだよ」

芳「え、貴方、へえー」

武「それは気の毒千万な、お手数をかけて、全くはお家主が彼あ家は金持すこだどのお指図で……」

藤「私わたくしは其んな事は云やアしません、驚いたなア」

何うも沈着おちついたもので、是から八ツの御退出おさがりから一同曲淵甲斐

守公のお白洲へ出ました、孫兵衛の娘お筆も引ひき出され、訴えの趣きを目安方が読上げますると甲斐守様がお膝を進められまして、

甲「備前岡山無宿つきおかこうじゆうろう月岡幸十郎」

幸「へえ」

甲「其の方が訴え出でたる趣きは十一月廿二日の夜芝赤羽根勝手ヶ原中根兵藏方へ忍び入り、家尻を切つて八百両盗み取つたる金子の内を、数寄屋河岸の柳番屋の蔭に於て是なる筆に恵み与えたるに相違なく、筆には毛頭罪なき事であればお免しを願ひ度趣を訴え出でたるが全く其の方が盗み取つたる金子を是なる筆に遣わしたに相違ないか」

幸「えゝ先夜は私が柳番屋の蔭を通り掛りますると、是なる筆が私の袖に縫つて涙を零しながら頼みます故、何故袖乞をするかと尋ねましたら、父が長らくの患い、腰が抜けて起居も自由ならず商売も出来ませんので其の日に追われ、僅な物も売尽して仕

方がなく明日米を買つて与える事が出来ませんと、真に袖を絞つて泣いての頼み、真実面に顛われましたから、あゝ感心な事じやと存じまして、遂刻印金とは存じて居ながら、是なる娘に恵み与えました金子が却つて娘の害と成りまして、長らく病んで居ります処の親を一人残して入牢仰付けられたは如何にも筆へ対して手前氣の毒な思いを致しました、筆には決して科のない事でございますから何うか町役人共へお引渡しに相成りますれば有難い事に存じます」

甲「うむ、是れなる筆に何両の金子を遣わした」

幸「えゝ其の勘定は確と心得ませんが五十金足らずかと心得ます、唯小菊の上へ掴み出して与えました事ゆえ勘定は確とは心得

ませんが、残余あとの使い高に依つて考えますと五十金足らずかと心得こころます」

甲「うむ、此の者に貰つたに相違ちがひないか、面体めんていを覚えて居るか」

筆「其の夜よは頭巾を被つて在いつしやいましたからお顔は覚えませんがお声で存じて居ります、頂いただに相違ちがひございません」

甲「うむ、町役人」

藤「へえ」

甲「此の筆なるものゝ父は長らく病中夜分よるもおち／＼眠りもせずずに看病を致して、何も角かも売尽し、其の日に迫つて袖乞すそごに迄出る事を支配をも致しながら知らん事は有るまい、全く存ぜずずに居

つたか」

藤「遂ついで心附かずに……」

甲「呆たわけ、其の方支配を致す身の上で有りながら、其の店子たなこと云

えば子も同様と下世話で申すではないか、其の子たる者の斯かる難儀をも知らんで居おるといふ事は無い、殊には近辺の評も孝心な者で有ると皆々が申す程の孝心の娘なれば、其の方心に掛けて筆を助けて遣らんければならぬ、夫それが手前の役じゃ、貧に迫つて難澁なれば難澁の由を上へ訴えてお救すくいを乞うとか何とか訴出れば上に於て御褒美も下くだし置かれる、然しかるを打捨て置いて袖乞ふとりしまりに出る迄の難澁をかけると云うは、其の方不取締ふとりしまりで有るぞ」

藤「お……恐れ入りました」

甲「筆其の方は見ず知らずの者より大金を貰い受け、紙を披ひらいて見たら多分の金子が有ったなら、早々町役人同道にて上へ訴え出なければならん処を、隠し置いて其の金を使いしは不届至極で有る、けれども其の日ひに差迫つて、明日みょうにちは父に米を買つて与える事も出来ぬ処から、其の金子を以て米薪に代えて父を救つた其の孝心よっに依よつて父を思う処から、悪い事とも心附うっかかず迂濶うっかり其の金を使い是から家主と相談の上で訴え出ようと云う心得こころで有ったが、其の中うちに勘次郎という者が其の方の手許に金子の有る事を知つて盗み取つたが、全く訴え出ようと心得こころて居おる内に其の金を取られたので有ろうな」

とお慈悲な事でございます。

十

お筆は漸ようく々顔を上げまして、

筆「はい左様で」

甲「何どうじや町役人まちやくにん」

藤「全くは是から訴えようと内ない々下した話ばなしもございましたので、処を盗み取られましたんで」

甲「これ下話が有つたら何故なぜ訴えぬ」

藤「いえ是から下話を致そうかと考えて居りましたんで」

甲「なんだ、筆なる者は罪もなく殊に孝心な者故助け度たいとて

訴え出でたる幸十郎は最いと神妙の至りで有る、筆儀ぎは咎とがも申し付
 けべき処なれども、其の親孝心に愛めで、上に於ても格別の思おぼしめ
 召しを以て此のまゝ免し遣わす、立ちませえ」

筆「はい」

と立とうとする途端にびいんという仮牢の錠の開く音が頭上に
 響びつくいて、恟うちりする中に大戸をガラ／＼と開けて仮牢から引ひき出さ
 れましたは、禿はうくげた頭の月代さかやきは斑白まだらになりまして胡麻塩交りの
 髭ほくが蓬々ほうく生え頬骨が高く尖り小鼻は落ちて目も落おちくほ凹おちくほみ下を向
 いて心うちの中に或遭王難苦わくそうおうなんく、臨刑りんけい慾よく寿終じゆう、念彼觀音力ねんびかんのんりき、
 刀尋段々壞とうじんだん、或囚禁枷鎖わくしゆうきんかき、手足被しゆそく被び柵ちゆうかい、念彼觀音力ねんびかんのんりき、
 やくねんとくげだつ、然得解脱なかに、と牢なかの中でも觀音經かんのんぎやうを誦よんで居たが今ヒヨロ

くと繩に掛つて仮牢から引出ひきだされるを見ますると、三年以前に別れた実父の下河原清左衛門でございますから何う云う訳で此の有様はと、はツと思ひまして、

筆「お父とうさん」

と云い掛けると清左衛門が、むゝと眼で知らせますから、

筆「はい」

と泣き度たい程かなし悲いのを耐こらえて砂利の処へぺたぺたと坐りました。明奉めいぶぎょう行だから早くもそれと見て取つて、

甲「筆暫く控えろ」

筆「はい〜」

甲「是なる浪人者を其の方は見知り居おるか」

筆「はい、い、え」

甲「隠すな、隠すと為にならんぞ、是なる浪人下河原清左衛門は、長谷川町の番人喜助を毒殺致した罪に依つて長らく入牢仰せ付けられ、再度の吟味に逢うと雖も白状致さぬ、毛頭覚えはないとのみ、然れば主名を明かせと云えば武士の道が立たん、土道が立ち難いに依つて主家のお名前は仮令身体が碎けても白状を致さぬと申し張つて居るが、是は其の方の伯父か」

筆「いゝえ」

甲「父か」

筆「いゝえ」

甲「何故隠す、主家の名前を申せば免して遣わす、其の方見知なげ

りの者で有れば申せ此の者が助かる事有るぞ、其の方は元築地
辺に居つて何か災難に依つて入水致した処を助けられたのが只今
の孫右衛門で有る由上に於て篤とくと其の辺は調べが届いて居る、孫
右衛門は養父じゃな、是なる清左衛門は其の方の実父で有ろう」

筆「はい、……いゝえ」

云わんと致しますると清左衛門が目で知らせるから口を開く事
が出来ません。

甲「何故言わぬ、此の者は其の方と面体恰好が能う似て居るぞ、
其の方が強しいて隠すと此の者は重き刑に行われるが、其の方の実父
なれば、清左衛門の口から土道立ち難よっいに依て申せまいが、其の
方が申すに仔細はない、其の方の実父ならば実父だと申せば宜し

い、実父と申すが悪いならば此の者の主家の名前を申せ、其の方が申すに仔細は無い事で有る、何処どこまでも云わんで居ると此の儘此の者を無実の罪くるしに苦むるは不孝で有ろうが」

筆「はいく／＼申し上げます」

側から藤兵衛が低い声で、

藤「云いなよく、あゝやつてお柔やわらかに仰しやる事だから、云わないと宜いけないよ、隠し立てをしちやア彼方あっちも盗賊どろぼう、此方こっちも盗賊、然そう幾そらも盗賊と心こころ易やすくしちやア困るから云いなよ」

筆「はい、実わたくしは私の血を分けました親共でございます」

と白状を致しました。其の時御奉行は、

甲「うむ、然うじやろう、何れいずの藩じや主名を申せ」

筆「はい、巢鴨傾城すがもけいせいケ窪くぼの吉田監物よしだけんもつの家来下河原清左衛門と申す者でございます」

甲「うむ、何なにゆえ故屋敷を出て浪人致した、主人の不興でも受けて追放を仰せ付けられたか何う云う事じゃ」

筆「少々御主人様の事に就きまして親共が諫言かんげんを申した事が

ございます、其の諫言が却つて害に相成りまして不興を受けてお暇いとまになりましたが、父は物堅い気性故、仮令主たとしゆうでも家来でもお家の為を思ふ者を用いなければ止むを得んから主家しゆかを出る、飢死うえじにしても此の屋敷には居らんと、重役の者と争論いさかいを致しまして家出を致しまして四ヶ年程浪人致して居りました」

甲「うむ、主家に何どの様ようの事が有ったか其の方わき弁まえて居おるか」

筆「深い事は存じませんが、御妾腹おめかけばらの」

と云い掛けると清左衛門が顔で頻しきりに電いなびかり光をして居ります。

甲「清左衛門控えろ、此の者が申すに仔細こしゆはない、其の方が口外致せば故主こしゆの非あぐを挙る事になるかもしれない、筆の孝心より申すのじゃ仔細はない、控えて居れ、ふむ、主家の妾の腹に宿した子が有つたと」

筆「はい、お妾の腹に出来ました鐵てつ之丞のじようと申します者を世に出いだそうというお妾の悪計たくみに附きました者もございました、御本腹きんのじようの金之丞のじよう様を毒害しようと云う悪計もございましたと云う事は薄々聞きました事で」

甲「うむ、其の方に叔父が有るか」

筆「はい、ございます」

甲「是なる清左衛門の兄で有るか弟か」

筆「弟でございます」

甲「うむ、それはまだ監物の屋敷に居るか」

筆「未だ居るでございましょう」

甲「吉田監物家来下河原清左衛門、其の方は武士道が立難いに依つて身体ひしびしおの醜ひしびしおになり骨が砕けても云わんと申したが娘が親を助け度いと云う孝心から此の事を申したのじゃから其の方に於ておい武士道の立たんと申す事は聊いさゝかもない、筆、叔父の名は園そのはちろう八郎と申すで有ろうの」

筆「はい園八郎と申します」

甲「能く申した今こんにち日は此の儘下げ遣わす、こら町役人ちようやくにん筆しつかを確しかと預け置くぞ、明日みょうにち改めて呼び出すいだから左様心得ろ」

○「畏かしこまりましてございます」

甲「双方立ちませえ」

と云うので双方ともに起ち、下河原清左衛門は仮牢へ這入り、お筆は町役人が預かつて帰りました。孫右衛門の悦びは一通りではありません。翌日になりますと、新吉原町辨天屋祐三郎抱え紅梅ならび并ならびに下河原園八郎という清左衛門の弟をお呼出しに相成るといふ一寸一息つきまして。偕さて其の次の日は、吉田監物家来下河原園八郎がお呼出しに相成り、縁側の処へ上かみしも下無刀で出て居ります。

曲淵甲州公は御席ごせきに就きましたが、辨天屋の抱え紅梅は白洲迄は

出て居つたがまだお呼び込みにはなりません。

甲「吉田監物家来下河原園八郎」

園「はつ、罷出まかりいでました」

甲「其の方は三ヶ年以前の十一月三日、長谷川町の番人喜助に銘酒じやと申して徳利とくりを持参致して毒酒を置いて帰り候由、番人喜助の女房梅なる者より訴えに相成つて居おるが、夫それに相違有るまい、何どうじや」

之を聞くと園八郎は額へ青筋を出しまして顔色かおいろを変え、袴の間へギユツと手を入れて肩を張らし、曲淵甲州公の顔を昵じつと見詰め居りましたが、

園「是は怪けしからん仰せにござります、長谷川町の番人に毒酒

を与えましたなどと云うは毛頭覚えなない事でございます、怪けしから
んお尋ねを蒙るもので」

甲「控えろ、其の方如何様いかように陳じても天命は遁のがれ難い事で有る、
其の方は監物の妾村むらと申す者と密通致し、村の腹へ宿したる鐵之
丞を家督に直さんが為に、本腹の金之丞へ毒藥を授け金之丞を毒
殺致して妾の腹に出来たる鐵之丞を家督に直さんという企たくみを致し
た事は上に於て篤と調べが届いて居おるぞ」

園「是は何うも思い掛けないお尋ねを蒙りますもので何故なにゆえに
左様な事を」

甲「黙れ、其の方如何様に陳じてももう遁のがれる道はないわ、辨
天屋祐三郎抱え紅梅を呼よび出いだせ」

是から紅梅が出て来ましたが娼妓などは立派に着飾つて出るもので、お白洲に出るような姿ではない。前ぜん申し上げます通り阿古あこ屋やの琴こと責ぜめの様な姿で簪かんざしを後光の様に差さかざして居いるから年を取つて居ても若く見えます。ずいと出まして、御奉行の方を斜はすに向いて坐つて居ります。

甲「辨天屋祐三郎抱え紅梅、勇之助代かや、差さし添そうたか」

かや「差添さしそいましてございます」

甲「其の方亭主喜助に毒酒を置いて参つた侍は是なる侍で有ろう、篤と面体を見い。近う寄つて面体を見い」

ずいと来て、

紅「あらまア何うもまア図々しいじやア有りまへんか、あんな

高い処あがに昇つて真面目な顔をしてえて上かみしも下しもを着てえてさ、何だなんッて此んな悪党に上下なんぞを着せて置くんですよ、牢の中へ入れたんじやア有りまへんか」

甲「いや前に取押えて入牢申し付けたは清左衛門と申す者じや」
是から清左衛門をお呼出しに相成りまして、

甲「兄弟で有るから能く肖にて居いるが、能く見ろ違ちがうて居るだろ
う、篤と面体を見定めよ」

という御沙汰で、紅梅は熟つく／＼々々、両方を見較べて清左衛門に向
い、

紅「まあ何うも濟まない、堪忍してお呉んはいよ、肖にてえる
つたつて本当に能く肖にて居るんだものを、成程貴方の方が少し老

けて居りますが余りあんま能く肖て居るからお前まはんだとばかり思つて濟まない事をしましたが、此ん畜生、宅うちの人に毒を盛つて是はお上のお上りの御酒だから惜しいんだなんぞと云やアがつて、そんな高い処に上げて置かずに此処こゝへ下おろしてお呉んはいよ、私やアしがみ附くよ」

甲「控えろ、仮令たとひ三寸不爛ふらんの舌頭ぜつとうを以て陳じても最早逃れられぬぞ、是なるは番人喜助の女房梅で有る、見覚えが有るか何どうじゃ」

と云われ流石さすがの園八郎も差迫つて紅梅を見てこう下を向いて居ります。

甲「何うじゃ、是にても尚陳ずるか、相違有るまい何うじゃ」

園「え、恐入りましてございます」

甲「縄打てえ」

と云うとトンと縁から下へ突つきおと落されると直すぐにバラ／＼と来て縄を掛ける。最早のが遁れる道はない、毒薬を盛つたに相違ないと云う事が速すみやかに分りましたから、此の者は主殺しゆうしに当りますから、磔はりつけ刑になるべき処を、吉田監物の家が断絶になるから家事不取締りしで、此の園八郎も妾しょうのお村も斬罪に処せられ、吉田監物は半地んちに残したはお上の慈悲でございます。又下河原清左衛門が助かると云うのは、全くお筆が孝行の然しからしむる処で、親子諸共に罪を免されて出る。彼かの月岡幸十郎は訴え出まして、残らず事柄が分りますと云うのは、彼の伊勢銀に這入りまして家尻を切つて二

百両の金子かねを取ったのも此の者で、幸十郎は後に相当のお仕置に相成りました。下河原清左衛門親子は立帰り、主家は半地にお取立てに成りましたが、奥方の耳へも此の事が這入りまして、清左衛門親子はお召返しに相成りましたから、大恩が有るといふので、かの腰の抜けた孫右衛門をも屋敷へ引取り、十分介抱して之を見送り、後孫右衛門は死去みまかりましたが、下河原の家はお筆が養子を取って家督を致しまするといふお芽出度いお話でございます。

(拋酒井昇造速記)

青空文庫情報

底本：「定本 圓朝全集 卷の一」近代文芸・資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年6月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の一」春陽堂

1926（大正15）年9月3日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ

「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号「86」）を、大振りにつくっています。

※「孫右衛門」と「孫兵衛」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「政談《せいだん》月《つき》の鏡《かぐみ

《 》 となっ ています。

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年5月9日公開

2016年4月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

政談月の鏡

三遊亭圓朝

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>